

安全なる船溜を形成す。此の地の船頭、海峽の潮流に練熟するは、當然の事にして、海峽の東口外に於ける水夫の、唯一の權威たりしなるべく、此地を措いて、海峽に接近せる船頭の團體とすべき地なし。されば、足利尊氏、九州より再舉、東上のときも、義經が壇浦の戦に乗りたりし、串崎船十二艘の子孫を用ひたること、梅松論に記せり。近世三百年の間、長府の舊藩も亦た此地に水軍を置き、參勤交替の航行に、その水士を用ひしのみならず、水軍の練習、海上砲の研究までもなせり。今に至るまで、その地を御船手と稱す。串崎は、海峽に於ける水戦の一名所たらずんばあらず。義經は自ら麾下の勇士を率ひて、串崎船に乗り最も熟練したる船頭を利用し、自から先鋒に進んで、縦横無碍に乗りまわし、戦場の懸引自在に指揮するのみならず、機に乗じて平氏の中堅を突破せんとするの決心を有せり。知盛も亦た、義經が必らず邁進すべきを知り、その狙撃を麾下に命じたり。平家物語に、義經は小男の色白にして、反齒なり。但し、鍔、直垂を、つねに著替うるが故に、見分け易からずと記せり。知盛が、海峽を東過し、豊前、田ノ浦に沿ふて、船列を布きたるは所由あり。一には陸上の背面攻撃を受けるの恐なき爲め、また一には南水道の潮流を利用せんが爲な

らずんばあらざるべし。海峽の東口外、その最大なる潮流たる北水道は、長門の方面に偏するを以て、豊前側より進んで敵軍を、干珠、満珠の方面に壓するに可なる可く、且つ、南水道の激流の一部は、田ノ浦の前面に至つて回流して、陸岸に近づき、全くその流向を、一變するあり。知盛は、恐らくは、此の湍潮を利用せんとしたるべし。知盛は、全軍を三分して、九州勢を先陣とし、平氏の一門を、中堅とし、四國勢を後陣とし、此の湍潮を利用して、三方より源氏を包圍し、一舉に、全勝を博せんとしたるものなるべく、その大體の策戦たる、落潮の大勢に乗じ、その漲潮とならざるの間に、勝運を決せんとしたるが、四國勢の闘志なかりし爲に、豫定の戦闘能率を得る能はざりしと、源氏が、能く平氏の壓迫に耐へて、落潮に至り、海面の形勢一變したる爲め、平氏は終に敗北の已むなきに至れり。此の大戦に、平氏の死命を制したるものは、義經が串崎船を用ひたるの一事にあり。平氏の爲に計るに、彦島を根據地としたる知盛は、早く西來する源氏の爲に、海峽の東口を扼するの策を運らし、串崎船を招致し、以て、海峽の潮流に諳練せる水夫の集團をして、海峽外に存するなからしめしならば、義經の奇才といへども、海峽の潮流を制するの策あるを得ざりしなるべし。然

れども、かくの如きは、事後に及んで、萬全を策するに類するものなきにあらずといへども、既に海峽に占據して、串崎を知らざることある可らず。但だ串崎は、恐らくは、一勢力として、平氏の爲に、認められざりしなるべく、敏とくも、これを活用したるが義經たる所以なりしといふべし。

午刻、兩軍、船を進め、三町ばかりの間隔となるや、矢合はせを始む。源氏、頗る苦戦、辛うじて潰敗を免かるゝの有様にありしとき、潮勢一變し、平氏の船次第に西に押し流さる。義經は、平氏方の船頭、水夫を射すくめ、斬り捲り、以て、先づ平氏の進退の自由を奪ひしは、軍艦の海戦に、砲彈を機關に命中せしむると、その趣を同じくし、將を獲んとするに、先づ馬を射るの概あり。此の事、平氏の意表に出でたり、本邦の水戦に、一機軸を放出したるものといふべし。平氏は、また唐船に雜兵を載せて、船容を盛にして、敵を欺き、勇士を小舟に載せ、敵の不意を打たんとしたるが、此の計、義經の知るところとなりて、挫折し、事々、策戰の齟齬を來たし、押されて、壇浦に壓迫され、勝敗、此に決せり。吾妻鏡に據れば、先帝を抱き奉りて、入水せしは、按察局にして、源氏の爲に助け上げられたり。平家物語にいはく、

先帝、さればいづくへぞと仰ありければ、彌陀の淨土へぞ、我君とて、波の下にしづみ給ふとて、

今、ぞ知る、身もすそ川の御ながれ、波の下にも、みやこありとは、

かなしきかなや、無常の風、忽に花のすがたを散らし奉る、いたはしきかなや。分段の荒き波、忽に玉體を沈め奉る、昔は、萬乗の主として、殿をば、長生と名づけ、門をば、不老と號せしかども、雲上の榮花盡はて給て、海底に沈み給ふ。女院、これを御覽じて、御焼石、御硯箱を左右の御袖に入れさせをはしまして、一所にぞ入らせ玉ひける。

平氏は、三種の神器を奉安して、最期の運命を共にすべき決心を以て戦ひしかば、神器を奉還するは容易ならずして、神鏡、神璽は、還り給ひしかども、神劔は、遂に還り給はず。建久二年閏十月、阿彌陀寺に御廟を建て、安徳天皇を祀る。

此の大戦は、半日にして決したるが、海峽に於ける古今の大戦は、後の四國聯合艦隊の來襲と併せて、二とし、ともに海峽の東口外、田ノ浦と前田、壇浦との海面に行はれたり。

## 四 鎌倉より豊臣氏の末に至る

此の時代に、海峽に新らしき關所が設けられしやは研究に値す。舊關は、既に、その用をなさず。源平戦の後に、長門探題を置きて、海峽の警固に任じ、土肥實平、命ぜられて、來り、長府に城きて居る。土肥山は、則ちその遺趾なり。續いて、鎌倉幕府は、外寇に備ふる爲め、長門警固所を置く。その遺趾は、詳ならず、大日本地名辭書には、これを赤間關に置き、上古の衛戍に代はれるものとすといへるも、赤間關のいづれに置きしや、確かならず。鎌倉幕府の滅亡のときに、長門探題に北條時直あり、鎌倉の急を聞き、壯大なる船隊を率いて東航し、阿波の鳴門のあたりにて、その滅亡を聞き、歸りて九州に入らんとし、能はず、官軍に降りしことあり。此の長門探題は、則ち長門警固所を司りし重任にあり、されば、續いて、土肥山に居りしか。世間、前例を襲いで、探題と稱せしか。

此頃より關船の事、史上に見ゆ。關船の起源、詳かならず。關にて造りしを以ていふと、解釋せるは、未だ當らず。博士久米邦武氏は、之を以て海賊防備の爲にする

ものなりとせるは、その證據、確かならず。關船は、長門警固所に所轄せし軍船にして、平常は、九州渡海の用に充てしものなるべし。關船は、櫓數三十五挺より七十五挺までのものあり。後には、全國一般に使用せらる。當時にありては、最大型の船艦にして、足利尊氏が九州より東上の時の海軍の主力も、關船にあり。せき船と記せるは、則ちこれなり。海峽に於ける交通の發達史に、特筆すべき船舶なり。關船に關する古文書は、阿蘇文書のうちに、唯だ一通、關船三十隻、海賊船と合同して、島津氏を苦しめたる記事を認むるのみ。則ち關船發達の由來、詳ならずといへども、海賊船に備ふる爲といふよりも、東亞の國勢、勃興して、本邦に迫り來れる影響を受けて、海峽に發達したるものなるべく、その太だしく、大型なるは、寧ろ、蒙古の、戰艦に學び得たるものといふを得べし。

建武三年、足利尊氏、京都より敗走して、二月二十日、赤間關に著して、滯泊し、二十五日、筑前の少貳一黨の來迎を受け、二十九日、出發して九州に向ひ、北九州の沿海を航行すること一日程にして、蘆屋港に入る。その目的地、筑前にあり。尊氏、東上のと、き、播州灘にて風波に阻てられ、進むこと能はずして、直義と兵庫に、海陸相會するの

期を誤り、戦機を逸せんことを恐るゝに當り、船頭の中に、鶴江の漁夫あり、尊氏の募に應じて、航海長の任に當り、能く播州灘の風波を航過して、戦期に合せしこと、梅松論に見ゆ。鶴江の名は世間に多く知られず。鶴江は玉江と共に、長門、萩に於ける改良漁船の本場なり。改良漁船は、漁業及び造船の上に於て、本邦に於ける唯一の、輕捷耐久の性質を具し、その構造に於て、最も推稱すべきものあり。防水壁を有し、數多の錨を備へ、大風濤に逢うて櫓柁の用可からざるに至れば、錨を以て操縦す。漁夫はこれを以て、日本海を自由に遠漁し、風濤に處して、生命の安全を信じて泰然たること、宗教的信仰に於けるが如きものあり。古來、國家的に、最も貢獻したる光榮ある事實は、日清戦役に、漁夫五十餘名募集に應じて、山東に赴き、漁獲を以て食糧を供給し、第二軍に隨つて臺灣に赴き、征討戦中、一たび萩に歸りしときは、長崎に寄港せしが、尋いで萩より臺灣に直航し、一週日を以て安着し、續いて第二軍の爲に、食糧供給に自せり。事終るまで、一人の傷病なく、悉く任を完くして、故郷に還る。臺灣總督府、乃ち感狀を賜ひ、五十餘名の姓名と、その事業とを列記して、これを表彰せり。蓋し、本邦の漁夫として、空前の大光榮たらずんば、あらずして、海峽の漁業に於け

る地方色の光彩あるものとす。改良漁船の構造の完成したるは、維新前後にありといへども、その航海術の發達したるは、悠遠たる古代にあり。則ち海峽の、朝鮮海に臨める特殊なる地利が、齎らし來れる特色にして、近世、毛利氏が萩に居城を築くに至りて、ますます、その特色を發達せしめたりといへども、その以前、未だ寂寞たる漁村に過ぎざりしとき、早く既に、異常の發達をなしたるは、唯だ一の梅松論、これを證して餘ありといふべし。

尊氏西上以後、南北朝の際、厚東氏、長門の厚狹郡に起りて、東亞に通商貿易を營み、進んで海峽に據り、尋いで東境より壓迫せる大内氏と争戦止まず。世は應仁以後の戦國に入りて、海峽は、厚東、大内、少貳、大友、毛利の戦場となり、遂に毛利氏の所領に歸して關ヶ原に及ぶ。

戦國の間、北九州に於ける戦跡少からず。門司の古城山も亦た、その顯著なるものの一なり。海峽は、戦争の衢たると共に、東亞に對する交通の要路たるの地位、いよく發達せるは、此の時にあり。瀬戸内海に發達したる海賊、海峽に伸び、海峽は、和寇出沒の要衝となり、隨つて、東亞の文化も輸入されたるべし。舊門司に、僅に遺

趾を存する崇聖寺は、その一斑を窺ふに足るべきものなり。崇聖寺版の法華經あり。佛教史上に、頗る珍重すべきものにして、その研究は、また一個の新問題たるを失はず。崇聖寺の名、全く没して聞えざりしを、近來、門司の前市長たりし永井環氏の探討により、その遺趾を發見されたり。當時かくの如き名刹と出版とありしを見れば、海峽の文物、また想像するに難からず。而して、赤間關の方面のみならず、南岸、門司の方面、また有力なる港津ありて、相應の繁華を呈したりしを知る。舊門司の遺趾に、泉屋敷あり、崇聖寺と相映發して、當年を偲ぶべきものなるべし。泉屋敷に關しては、文獻の徵すべきものなしといへども、和寇時代に、明國に交通せし船舶の中に、豊前門司の船四隻、泉丸二千五百石、寺丸千八百石、宮丸千三百石、夷丸七百石あり。恐らくは、和寇船なりしなるべし。その中の泉丸は、泉屋敷と關係あるべし。泉屋敷は、今、三井銀行の社宅、墓を列ぬ、その隣地に、御厩道の上、御厩道の下、屋敷道の上、屋敷道の下、等の小字なほ存するを見れば、泉屋敷は、ともかく豪族の邸宅たりしや疑なし。崇聖寺も泉屋敷もその存没の年時、知るべからず。然れども、港津のあるところ、必ず寺あり。而して、東亞に對する交通の關係上、輸入の文物の精華

は、その寺に存すること、厚東氏の菩提寺、東隆寺に於けるが如く、今、僅に白檀の老木と殘すのみといへども、崇聖寺にも、亦た必ずや、輸入文化を尋ねべきもの存せしなるべし。戰國の時には、崇聖寺、泉屋敷ともに、既に亡びたるか、海峽を統一したる大内氏の歴史及び資料のうち、これ等の事蹟を徵據するに足るべきものなし。

戰國の際、海峽を統一したるは大内氏にして、その海峽に於ける政治的施設も亦た徵すべきものあり。大内氏が明國貿易の勘合印を掌り、支那、朝鮮に交通し、その文物を輸入し、山日本は世間に知らる。防長の紙を送りて、印刷を彼土に托したるなり。その餘、多くの輸入品の、なほ今日に傳ふるもの少からず。然れども、大内氏の自營よりも、大内氏の政治的保障の下に、海峽に發達したる通商の機運は、更らに記念すべきものならずんばならず。大内氏は、赤間關に代官所を置き、海峽の行政に任せしめしが、その遺趾は、詳ならず。その頭目の名も傳はらずといへども、往昔、城山の城主に粟屋氏あり。山下に居館を設け、すべての行政に任せしとの傳説は、參考に値すべし。則ち代官所も亦た城山下にありしか。而して赤間關の繁榮は、漸く市邑を形成し、町に町役人あり、人民の總代として自治に任せしものと思はる。

抑赤間關は、政治的に發達したるに非ずして、通商的に發達したる、經濟上の自治市なり。それが、泉州堺の如き徑路を取るに至らざりしは、雄大なる政治力の保障を受けたるを、堺と異なりとするなり。允滲入唐記に、その船赤間關に着せしとき、關吏の檢察を受けたることを載するを見れば、海峽に於ける大内氏の行政力は、王朝の關のときと面目を異にするを知るべし。大内氏壁書の中に、關の町、太郎右衛門、次郎三郎、阿彌陀寺領、次郎右衛門より、法を破る者少からざるを訴うるに由り、更に海峽渡船規則を令し、それに背くものは、代官所に注進し、山口に送りて、法に問はしむべきを嚴命し、これに對して、太郎右衛門等、連署して、受書を上れり。赤間關は、略して、單に、關といふ。關の町と阿彌陀寺領と別てるは、肩を竝べたる小市邑が、北岸に連續せしものと見るを得べし。

大内氏壁書に注意すべきは、兵船渡海役御定法と、關、小倉、門司、赤阪の渡賃の事との二なり。渡賃の事は、

- 一、せきと小倉との間 三文
- 一、せきともじとの間 一文

- 一、せきと赤阪との間 二文
- 一、よろいからひつ 十五文
- 一、からひつ 十五文
- 一、こし一挺 十五文
- 一、馬一疋 十五文
- 一、犬一疋 十文

これに由つて見れば、海峽の航路は、小倉、門司、赤阪の三ありしを知る。渡賃の變遷は、これを今日、關門連絡船の十五錢なるに比べて、世運の沿革を徵すべし。

兵船渡海の定法に於ては、九州に兵船渡海の際には、何時にても、關は、その負擔に任ずべく、また、大内氏、九州に進發に際し、御座船を關に命ぜし時、浦役錢を以て進調すべきを、町役人より答申せしことあり。此の時、人民のうち、或は寺僕、武家の被官など、稱し、出錢を拒みし者あり。此輩は宜しくこれを追放すべしと命ぜり。

海東諸國記に、關の豪族、韓國に交通せし者の中に、或は、鎮守、大守など、自ら僭稱せしものあり。これ等の人物の、果して何者なるかは、今、分明せず。文學博士渡邊

徳輔氏はこれを當時海峽を根據とせし海賊の首領なるべしと説けり。その眞否は知る可からずといへども、大内氏の統治の下にあると共に、海峽には自立して、東亞に對する交通、貿易を經營したるもの少からざりしを想見するに足る。

### 五 近世の海峽

近世に至り、帝國の經濟事情の一大變轉の爲に、商港としての海峽の地位は、一大躍進をなせり。それ以前、當時海峽の代表的都市としての下關は、未だ一小都邑をなすに過ぎざりしが、徳川時代の初期末に至り、都市として非常なる發達をなし、東は壇の浦より西は伊崎に至るまで、一里餘の間、民戸櫛比するに至れり。當時の人口に就ては、未だ精確なる研究なしといへども、長崎行役日記には、數千軒といひ、廣瀬淡窓の詩には一萬軒とし、獨逸人ケンベルの紀行には、戸口僅に四百となせり。これ等は、旅客の目算に過ぎずといへども、一萬軒は詩人の誇張なるべく、四百戸といふは餘りに少なし。而してケンベルと淡窓との間、年時の懸隔あり、一概にいふ可からざるものもあるべしといへども、口碑にも二百年前に、人口二萬ありし

ことを傳ふるを併せ考ふれば、下關が經濟的に躍進せし頃、五六千の人家ありしとすべし。

帝國經濟事情の一大變轉とは、第一、經濟組織が地方的より國民經濟的に進みしこと。第二、全國海運業が劃時期的の發達をなしたること是なり。徳川幕府の世となり、政治的統一が漸く確實に行はるゝと共に、經濟的統一も亦た行はるゝに至り、封建的事情の下に、着々として、國民的經濟の傾向を帯び來れり。大阪が、全國商業上の中心となり、各地の物産、此に集散するの情況を呈せり。これ實に、戰國以前に夢想する能はざりし光景なり。而して帝國海運業の發達は、ますます此の傾向を助成せり。北國より物資を江戸に送るに、陸運を已めて海運とし、山陰、山陽を迂回して江戸に達することゝなれるは、貝原益軒の續諸州めぐりには、僅に、二三十年來の事となせるを見れば、北國廻船の發達したるは、二百餘年以前の事なり。然るに、東西兩海路ともに險惡にして、風波、暗礁等の爲に、難破の厄に遇ふもの多きを以て、河村瑞軒、幕命を受けて、海運の大改革をなせり。彼の案に由れば、堅船を雇ひ、載量を定め、運夫を選擇し、嚮導船及び烽火の制を始め、東路に、漕務場四箇所、西路十四

所を置き、以て、難破の危難を救はんとせり。これに由つて吾國の海運は、多大の利益を受けたるうちにも、下關は、殊に、その惠澤を得ること多かりしを疑はず。何となれば、これに由つて瀬戸内海及び北國航路ともに安全を得るに至りしかば、北國の廻船は續々として、下關に集り、爲に海峽の繁榮を示すに至れり。下關に於ける北米問屋の鼻祖たる茶屋六左衛門の墓碑に據れば、二百年前に死したるを以て、略ぼ海峽繁榮の初期を確かむるを得べし。かくて北國の諸侯は、加賀を除く外、悉く、その領米を海峽に回漕するに至り、内海航運船は、これを大阪に賣り、海峽の商機を以て、活潑ならしむるに至り、遂に、出船千艘、入船千艘の光景を呈するに至れり。

下關の商業は、大阪より中國、四國、九州、北國との間に行はれ、商品の主要なるものは、正米、鯉節、鹽、綿、鹽等にして、正米は、その第一位を占む。而して下關は、生産地にあらず、その背域に、一大消費地を有するにあらず、二百年前より、その交通上の地利を利用する仲繼貿易たり。仲繼貿易は、海峽の、自然の地位が齎らすところの特色にして、海峽の經濟的地位の躍進といふは、則ち此の特色の發達に外ならず。商業機關としては、文政年中、先づ米商會所創立され、初は、米會所といひしを、後に物産會

所と改められ、次いで舊藩の直轄に歸して、諸荷物會所となり、更に維新前に至りて、繰綿會所を創立し、明治に至り、兩者を併合して、正米會所となれり。取引法は、初は大阪の制に倣ひて、帳合米相場と稱し、一種の空米相場を行ひしが、後、文久三年に至り、正米取引の方法に改む。正米取引は、實に、海峽の創見に屬し、延いて大阪より全國に及ぶに至れるものなり。蓋し帳合米相場は、投機取引の性質を有すれども、正米取引は、則ち純然たる賣買取引にして、毫も賭博的の性質を帯びず。蓋し、米商會所は、西洋の取引所とは、何等の關係なく、獨立的發達を遂げたるものにして、全國を通じて、東京、大阪、その他、僅に二三箇所ありしに過ぎず。而してその一を海峽に有す。海峽が本邦經濟史に一大貢獻をなしたるものは、此の米商會所なりといふべし。

下關に於ける、近世の營業の中、最も注意すべきものは問屋なり。問屋の起源は暫らく置く。徳川時代に至り、進展して委託販賣業となり、特殊物品の卸賣または大規模の委託販賣となるに至れり。海峽の問屋も、亦た這般の一般的趨勢に屬するものなるべし。源平時代すでに問屋ありしといふ説は、俄に信ず可からず。問



屋は海峽商業の中堅となり、問屋の委託販賣の下に、下關の貿易は行はれたり。問屋の株札は、初め三百六十二枚なりしを、寛政十年以後、四百枚に増し、總稱して萬問屋といひしが、その間に、大問屋、小問屋の區別を存し、北米問屋は、大問屋として第一流に居り、その數、十六軒あり。下關は、萩、長府、清末の三領地に分屬し、長府領、その大部分を占め、問屋は唯だ長府領にのみ存したり。

下關港の發達に伴ひ、商港としての設備も漸く進み、壇浦に燈籠堂を設け、外濱町に舟番所を置き、市内には、桐門二十箇所ありて、これを關所と稱し、日没後は、これを閉じたり。

交通上に於て、韓使の滞在と、和蘭貢使の宿泊とは、注意すべき事實なり。此の二者は、東西の文化を、海峽に輸入するに與つて力あり。町の大年寄、佐甲、伊藤の兩家は、交代に貢使の旅館に任せしが、その文化的記念として見るべきものは、阿彌陀寺町の伊藤氏に所藏する和蘭貢使の一行の南畫一幅の如きは、最も興味あるものなり。日蘭對譯字書を初めて完成したる甲比丹・ヘンドリック・ドローは、文化三年及び十一年の兩度に參府せしが、第二回の旅行に、伊藤氏に宿して、醫官・フアイルケ畫

筆を執りて、田子の浦の富士を描き、ドローこれに題贊をなせるものにして、その題贊に、山と谷とは相逢はされども、人と人とは逢うといふ意味を述べて、萬里天涯の異域に、懇遇を受けたるを感謝せるものなり。當時の伊藤氏の主人は、李太夫といひ、和蘭癖ありと稱せられ、夙に和蘭の文化に親しみ、食器一切までも、舶來品を點して、ドローを饗應したりといふ。若し、それ文人、墨客の此地に往來し、留滯するものは、漢たる古代より絶えず、千二百年前の昔、萬葉集に、すでに、海峽の影を載するもの少からず、近世に至り、海峽の交通、ますます自由にして、市況の殷盛を加うるに及び、文人、墨客集來し、山陽、竹田は、最も著聞す。竹田の如きは、一回の留滯、百二十餘日に及びしことあり。關西の商港は、一面に於て、文化の中心たるに至れり。

維新以來、開國の結果として、海峽が世界的交通の要衝となるに及び、下關港は、大船の舶地にあらずして、海外交通の中心は、門司に移り、海峽の形勢、一大變革を見、以て今日に至れり。然れども、下關は、依然として、内國貿易には、なほその地歩を維持しつゝあり。

## 關門海峽の統一問題及びその將來

### 一 統一の理由 上

關門海峽統一の必要は太だ明らかなり。統一に由つて享くべき利益を考うるよりも、統一せざるが爲に、現在に於て、享けつゝある不利益を考察するを以て捷徑とすべし。これを帝國の地圖の上に見るだけにても、一たび關門海峽を通過したる旅客にても、直ちに、交通上、及び貿易上に於て、關門海峽の統一に、想到せずんばあらざるべし。

關門海峽の兩岸の都市の經濟的關係の緊密なるは、唇齒輔車の關係よりも尙ほ痛切なるものあり。譬へば、唇の如く、缺の如く、その二枚の各片は、獨立するものにあらず、相待つて始めて、完全なる一箇の活用をなすものにして、各の一枚は、部分的に存在するものなり。故に、此の場合に於ける部分的の一都市の單獨的作用は、完全なる一個の二分の一の作用をなすものにあらず。本來の使命より見れば、部分

的作用は、不具的作用たるを失はず。今日に於て、關門海峡が、未だ統一せざるが爲に、東洋交通網の中心點たり本邦西部の代表的港湾たる此の海峡が、その本然の効率を發揮する能はざるに由つて起る不便と損害とは、非常にして、早晚統一問題が當然の歸著を見るに非れば、關門海峡は、經濟上、及び交通上に、理想的の發達を遂ぐる能はざるべし。

現在に於て、關門海峡の經營を企つる者は、その兩岸を引離して、考うることを得ず。一衣帶水に由つて載斷されたる海峡の對岸の都市と、港湾とは、地理的に二にして、經濟的には一たるなり。海峡及び北九州に於ける港湾は、下關、門司、小倉、若松の四あれども、此に謂ふところの海峡統一は、専ら下關と門司との港市を指す、此の兩者の統一の趨勢を擧んに、金融の實際に於ては、此の兩者は既に久しく、關門手形交換所組合銀行に由つて統一され、港湾の經營に於ては、門司港陸上設備委員會の組織が、下關門司兩市の市長、市會議長、商業會議所會頭を網羅するを以ても、現在及び將來を考察するに餘あり。海峡の統一は大勢なり。然れども、今日に於て、統一の實が、なほ擧ぐるを得ざる幾多の有力なる障害の存するあり。海峡の經營は、航

路より始まり港湾に及びたり。則ち水面下の岩礁及び淺洲は、先づ浚渫され、除去され、次いで港湾の修築を施、現に進行中にあり。海峡の港湾修築の効率を十分ならしむる目的より見ても、海峡は統一されざるべからず。海峡の經營は、海峡統一を以て大方針とすべし。海峡統一は、國家的の見地に立脚するものなり。

海峡統一の必要及び、その利益は對岸の孰れにも偏傾するものにあらず、兩者にともに均等なり。故に統一の實現の遲速は、兩岸地方の市民の自覺の深淺如何に由りて定まるべし。

## 二 海峡統一の理由 下

海峡統一を不可とすべき理由、一もあることなく、これを不可能とすべき理由もまたなし。唯だ、その實現に當り、行政上の統一を、最も困難となすべしといふは、唯一の異論なるべし。然れども、これとても、兩岸市民の自覺と、政府の決斷如何の問題にして勿論、不可能の事にあらず。

すべての事業を遂行するに當りて、多少の努力に値せざるものなし。況んや海

峽統一は、著名なる都市を併合し、縣を異にし、海を隔て、三百年來、政治を異にして、今日に至れる行政區劃の變更を敢てして、以て、一箇の有力なる經濟地帯を現出せしめんとする理想的の一大事業たるに於てをや。そのこれを実現せんとするに當りては、假令、その實勢が既に、理想的方針に向つて進みつゝある傾向を帶ぶるにもせよ、一旦、これを斷行せんとするに際して、種々困難の事情あるべきは、豫め推察するに難からず。故に、海峽統一の理想を現實せしめんには、その實現を容易ならしむべき形勢を馴致するの努力と困難に打ち克つべき誠意とを要す。抑かくの如き大問題は、地方的の情實を超越し、國家的の見地に立脚して、公益の上より打算せざる可からず。海峽統一は、帝國の經濟上、必要の問題にして、また、其の必然の歸着たらずんばならず。その歸着の時機の實現が早きだけ、それだけの利益あるのみならず、今や、極めて、その實現の急を要すること、切なるものあり。困難を豫想すれば、すべての理想は、皆、空想に終るべし。海峽統一の理想は、萬難を排して、實現せられざる可からず。

行政上に於ける關門統一の困難を説くものは、海峽の兩岸が、三百年來、舊藩を異

にし、廢藩後、四十有餘年、縣を異にし、國情、民風、全く異なるものあり。僅に一衣帶水を隔て、朝夕、相見えつゝ、あれども、その一衣帶水が、兩者を區劃して、各別天地をなさしむ。これを打して、一丸となさしむるは、容易にあらずとするものゝ如し。此論、有理のようには思はる。然れども、現在に於ける府縣の區劃を見るに、必らずしも三百年、行政區を同じくし、國情、風民の異ならざるものを標準としたるにあらざるは、勿論なり。主として地勢上の關係に依り、行政上の便宜を本としたるに過ぎず。此の立場より見れば、關門の統一は、決して不可能にあらず。海峽を通過する旅客は、甲板に立ちて、身は萬山に圍繞されたる湖水に浮ぶの感をなすべし。關門の海上、一見、眞に湖水の如し。若し、海峽の水面を、本邦の著名なる湖水に比較すれば、必ずしも大なる湖水にあらず。霞浦より遙に小さく、濱名湖、十和田湖にも伍するを得ざるべし。これを滋賀縣が、本邦最大の湖水たる琵琶湖を包含するに對照すれば、問題にあらざるなり。海峽は、本州と九州とを區劃すといふは、文字上の感觸のみ。眞箇に一衣帶水これを統一したる行政區の下に置くときは、その往來、連絡を、理想的に便宜ならしむるを得べし。更に海峽の一衣帶水を以て、湖水の外、河川に

比較せんに、新潟市は、市中に雄大なる信濃川を包容す。舊市街と沼垂との間に架せる萬代橋は、俾にて通常七分間を要し、橋長は、早稲瀬戸の約二倍あり。市中に之れほどの幅員を有する河川を包有して、統一せられたる一市の下にあり。若し、これを歐米の倫敦、紐育等の大市街が、莫大の幅員を有し、非常に長き橋梁を架せる大河を市中に包有せるに比較すれば、關門海峡の一衣帯水の如きは、論ずるに足らざるなり。これを以て見れば、關門兩市の間に横たはれる海峡が地理上、關門統一の故障たるべき所由となすに足らざるを知るべし。且つ、それ社會發達の趨勢に徴するも、山岳若くは高地を隔つる兩地を統一するは、容易ならずといへども、河川もしくは一衣帯水の湖海を隔つる兩地を統一するは、決して困難にあらず。關門兩市及び、門司市に並列して展開する北九州の都市一帯の如きは、小さき湖岸を環ぐる都市の集團と見做すを得べきものなれば、これを綜合、統一するは、必ずしも不自然の事にあらず。關門統一の理想は、これを現實の問題として、確實に、その實現を期するを得べし。

關門の兩市は、行政上には、對岸の別區劃なりといへども、その中間に挟む海峡に

由つて、交通上、及び經濟上に結びつけられたるものなり。此の海水は兩者を別つ所以にあらずして、兩者を一にする所以ならずんばあらず。地方及び國民の結合は、交通及び經濟上に於てするを、最も根抵深く、且つ有力なりとす。關門の統一は、這般の條件の上に立脚するものなるを以て、統一の基礎は、既に築かれたるものなり。此の基礎が、確たるに於ては、行政上の統一は、最後の順序として、自然的に解決さるべきものなり。今日に於て假令、それが困難に見ゆるとも、必ずしも失望すべき問題にあらざるなり。

### 三 海峡統一問題の起源及びその變遷

海峡統一は、自然的の條件なり。故に、統一論は、今より僅に、三十年前、門司市の開港地に指定せられたるときに發生すといへども、その淵源は頗る遠し。歴史的にその淵源に遡れば、五百年前、日本と東亞との交通、貿易の漸く發達したるときにあり。海峡は、東洋交通網の中心點たることは、先天的の事實なり。東洋に於ける交通の系統は、古來、幾多の沿革ありといへども、その日本との接觸に於ては、此の海峡

を以て「日本玄關」とせざるはなかりし。殊に、鎌倉時代より瀬戸内海の海上權の著るしく發達するに及び、海峡はいよゝ交通貿易上に於ける地位として、その重要な程度を、頃に加ふるに至れり。故に、歴史上の史實として、海峡統一問題の起りしは、鎌倉時代の末期にありといふべし。

邈焉たる上代の事は暫く措く、神武東征のとき、特に此地に、王師を留め玉ひ、神功征韓のとき、大本營を豊浦宮に置かせられ、進んで香椎に移り玉ひしを見ても、古より此の海峡地方が東洋交通網の中心點たりしを想像すべし。然れども、王代に於て、太宰府を九州に置き、これを以て、東亞交渉の府とせられしは、瀬戸内海の海上權の未だ發達せざりしときなりといへども、その位地、なほ海峡の背域たる地方に在るを失はず。遣唐使の一行、支那に出發するに當りても、留學僧の中、傳教、弘法二大師の如き、海上安全を英彦山に祈るの事あり。かくの如きの類別は、此に列擧するの煩を避くべし。鎌倉時代の初に當りて、有名なる源平戰爭が壇浦に行はれたるも、平氏が、此の本土と九州とを連結しつゝ、ある海峡の重要な交通上の地位を利用したるに本づくものにして、此の頃より特に、長門探題を置き、海峡地帯の一部た

る長府に居城を築かしめたる如き、海峡が政治上に、漸く、その重きを爲すに至れるを見るべし。これより以前、海峡が、有力なる行政上の機關を有せざりしは、海峡に都市と認むべきものなかりしを以てなるべし。都市の早く發達せざりしは、背域、狭小にして、爲に内地貿易の發達するに由なかりしに依らずんばあらざるべし。海峡の都市にして、最も早く開けたるは、勿論、下關なり。而して下關の發達は、大内氏に起り、毛利氏に榮えたるものにして、則ち、その背域地方の發達に由る。

王代に於て、下關が、未だ都市として見るべきもの少かりしときに於ても、政府は、東洋交通上に於ける重要な地位として、相當の行政機關を此の地に設置することを怠らざりき。驛遞の上には、驛館あり、外交上には、海門館の設あり。國防上に於ては、軍團を此に置き、長門の國府も亦た僅に、一里半を隔つる豊浦に置けり。有名なる壇浦の地名は、軍團の故跡なるべしといふ説あり。長府に、鑄錢司を置き、殊に、それが全國に於ける最大なる鑄錢司たりしことを推定するに足るべき事實あり。鑄錢司は、則ち今の造幣局なり。鑄錢司の舊跡と目せらるゝもの全國に凡そ八箇所あり。そのうちにて、遺跡を發掘、探究したるものは、著者が長府に於ける研

究を最初なりとし、その結果に依つて見るもその規模の、比較的宏大なりしことを知るに足る。而して發掘物に依つて見れば、當時の鑄錢の技術は、大陸より傳來したるは明らかなり。且つ、その行政機關としても、全國に於て最大なりしといふは、その他の場合には、鑄錢司と稱するに拘はらず、長府にのみひとり特に鑄錢使と稱したるを以て推知するに足ると思ふ。則ち此の地が銅鑛の産地に近かりしとするも、有力なる原因は、東亞大陸交通の衝に當り、大陸に近きを以て、その技術及び技術者を招致するに、最も便宜多かりしに由らずんばならず。此の一事は、古來、經濟上に於ける海峽の地位の有力なりしことを象徴するものとして、此に特筆する所以なり。

海門館の遺跡は、明瞭ならず。それに関する詩文に徴すれば、今の前田あたりなるべし。海門館は、則ち迎賓館にして、外務省の出張所ともいふべきものなるべし。東亞大陸より來朝する賓客が、初めて本土に上陸するときこれを迎接、歡待する機關にして、驛館と相待つて、本土に於ける外賓の第一印象に、好感を與へんことを期せり。當時の民家は茅葺なるに、沿道の驛館は、皆瓦葺たらしめ、一見、識別するに、易

からしめしが、漸次、屋壁ともに荒頽し、修繕費の支辨に堪えざるものあるに、勅令を以て、下關の驛館は、壁を白くし、屋を葺いてつねに燦然たる美觀を保たしめしことあり。王朝の外交が、此の海峽の地位を重要視したることかくの如し。これを今日、海峽に、未だ外交上、日本の玄關としての關門を、意義あらしむべき、何等の設備機關なきに比較すれば、寧ろ古人の用意周到なりしを思はずんばならず。蓋し、關門の間、早晩、吾が外交上の迎賓機關の設置さるべきは、期待して、疑はざるところなり。經濟上の鑄錢司、外交上の海門館は、ともに、古の海峽をして、西部日本に重きをなさしめたるものなりといへども、海峽には、兩岸の交通を聯絡する機關あるのみにて、北岸は長門國司に、南岸は太宰府の所轄に屬し、地方行政上には、海峽の統一、未だ行はれず、交通上、及び經濟上にも、未だ海峽の統一を痛切に感ずるには至らざりしなり。海峽統一を事實に於て、必要とするに至りしは、王綱弛み、民力漸く伸び、瀬戸内海には海賊發達し、太宰府の所轄する文字關も、空名を擁するのみに至り、人民の大陸との自由なる交通、貿易、漸く發展せんとするの頃にあり。則ち鎌倉時代の末期にして、而して海峽を統一したるは、中央政府の企畫にあらずして、地方豪族の雄

圖に由る。

初めて海峽統一の實を擧げたるものは、長門の豪族、厚東氏なり。厚東の名は、今長門、厚狹郡の村名に存し、厚東氏は世間に忘れらる。その城跡を、厚東山又は霜降岳といふ。その位置は、厚東川を環らして濠となし、宇部市の東に聳え、海拔は千尺に満たざるといへども、海に近く、山勢、特立して古來航路の目標となれり。厚東氏は朝鮮支那との交通、貿易を營み、その居城は、舶來の文化を象徴するに足るものあり。城下、行人の目を驚かしたりといひ傳ふ。厚東氏より以前に、周防に豪族大内氏あり、厚東氏の漸く崛起するに及び、東方に伸ぶるを得ずして、西方に發展し、長門を席卷し、遂に海峽を統一し、從來、その城下の宇部灣に經營したる對外貿易を海峽に移すに至れり。厚東城上に登りて、遙に海峽を望めば、形勢、歴々として眼中にあり、厚東氏が此に居りて、南下の雄心を起したるを追想するに足れり。蓋し厚東氏が海峽を得んとしたるは、これを大にしては、露國が南下して、浦汐を占領せんとしたる雄圖に同じ。而して海峽を統一して、以て、海峽を貿易港としての利用を完全ならしむるを期し、進んで對岸一帶の豊前地を占領し、海峽をその掌中に收めたり。當

時の海運及貿易に於ける船腹の關係、及び都市の發達より見るも、海峽の代表港は下關なり。海峽統一の嚆矢たる事實は、かくの如し。そも、海峽統一は、海峽の自然的歸趨なり、自然的歸趨の第一歩に就かしめたる厚東氏の名は、海峽に記念せざる可からず。

厚東氏は、大内氏に亡ぼされ、厚東氏に次いで、海峽を統一したるものは、大内氏なり。大内氏の亡後には、次いで毛利氏あり。大内氏時代の海峽統一に於て、行政上、海峽の連絡に苦心したるの事實は、渡船取締に關する一片の遺令に徴するを得べし。それに據れば、當時の海峽連絡は、下關より門司及び大里の渡船を主とし、下關門司間の舟賃は一文なり。これを今日の唐戸、門司間の連絡船賃の拾五錢なるに比較すれば、恰も百五十分の一に相當し、また以て海峽の發達を象徴するに足るものありといへども、貨幣の膨脹、物價の發達より見れば、必ずしも低廉なりとはいふ可からず。當時の門司といふは、今の舊門司の一部にして、太宰府時代の文字關より稍、西方に位すべし。厚東、大内、毛利三諸侯が海峽を統一したる間は、約二百有餘年、若し此の間に對岸の門司の發達を見るを得しならば、假令、その以後に至りて、行



政上に於ける兩岸の分離を見るとするも、兩岸は、既に、交通上、經濟上、延いて民風の上にも、その他種々の關係に於て結合上に有力なる事實を留めたるなるべく、隨つて、分離後にそれが潜勢力となりて傳るべく、後日、統一問題の發生するに當りて、若干の効果を現はす可かりしや必せり。毛利氏に至りては、海峡を統一したること前後二回あり。その初は、大内氏の遺圖を繼有したるときと、その後には、長幕の戰爭に於ける小倉領の占領となり。三者の間、約三百年を隔て、後の場合に於ては、民政を布きたりといへども、元來、一時的占領の目的に本づくを以て、寧ろ軍政に近く、且つその年月も短かゝりしが、ともかくも此の占領を以て、既往に於ける最近の海峡統一の事實となすべし。

歴史上の海峡統一を破壊したるものは、關ヶ原戰爭なり。此の戦役の結果として、毛利氏は海峡の對岸を失ひ、幕府は、その政策上、毛利氏を牽制する爲め、北九州に封ずるに、幕府に親密なる關係を有する諸侯を以てしたれば、勢、海峡の兩岸は、對抗の雰圍氣を漂はすに至るは、當然の結果にして、此に至りて、海峡の一衣帶水を以て、本州と九州とを、地理的のみならず、精神的にも、截然として、區劃することゝなれり。

かかる状態に置かれたる海峡は、如何なる意味に於ても、兩岸の連鎖とはなるべき筈なく、徹底したる天塹ならずんばならず。這般の感情を、各別に、兩岸に於て、培養すること三百年その氣分は、鬱乎として、地理的に一大勢力をなす。三百年の老木は、抜くべし。三百年の地方的感情を一掃するは容易にあらず。兩岸に於ける無意識的敵對の感情は、既に西海に、洗ひ去られたりとするも、三百年間、互に、塹を深くし、牆を築いて、その中に養成したる地方的文化の特異は、容易に、融和すべからざるものなくんばならず。故に今日に於て、海峡及び北九州の識者は、理想としての海峡統一を認めざるものなしといへども、これを高唱するに躊躇する所以のものは、これに由つて、地方的感情と文化との統一の困難を過重視するに外ならずして、且つその立脚地が國家的たるにも拘はらず、海峡統一の高唱に依つて、地方的感情を挑發し、平地に波瀾を起して、非難の的となるに至らんことを恐るゝに由るものといふべし。

維新後を待つまでもなく、維新前に於ける舊藩三百年の間に於ても、早く既に、海峡統一の必要を感じたること少からず。勿論當代に於ては、地方行政上の統一は

夢想す可からずといへども、交通上、殊に、對外關係に於て、海峽不統一の爲に齎らす不便は、やがて統一を思はしむるの潜勢力となれるに相違なし。北九州に於ける大名間の領境争、或は、外國漂流人の處分問題の爲に、海峽に領土を有する諸大名の間に、つねに紛争を生ぜる如きは、その顯著なるものなりしが、これ等は、なほ大問題にあらずといへども、海峽不統一より來れる缺陷なり。長州は、海峽に於て、攘夷を實行する爲には、對岸たる小倉領との聯絡の緊要なるを感じ、數回の交渉を重ねたることあり。四國聯合艦隊の前田砲擊に際しても、敵艦隊は、小倉領に接して、陣を布きたる事實あり。當時に於ける勝敗の大勢には、海峽の統一固より問題にあらず。然れども、海峽に於ける國防を全くせんには、海峽の統一を缺如す可らざるは、餘りに明白なる事理なり。されば、明治に至りて、陸軍要塞及び師團は、先づ、海峽を統一して、防禦の設備を爲したるにあらずや。海峽を俯瞰する儼然たる諸方の砲臺は、無言に、海峽統一の先驅者たることを語りつゝあるなり。故に、維新前にも、維新後に於ても、緊切に、海峽統一を促がしたる問題は、國防なり。海峽統一の問題は、五百年前、對外貿易上の必要に起り、維新前、國防上の必要に、その解決の第一步を占

めたるものといふべし。

維新前に於ける海峽統一に於ける特徴は、つねに北岸より南岸を統一したるにあり。厚東氏を始め、海峽統一の勢力たる大内氏、毛利氏は、いづれも北岸の領主たらざるはなし。關ヶ原戰後、海峽の兩岸對立の三百年間、南岸の領主は、小さく、北岸の領主は、大にして、北方の勢力、つねに政治的に、南岸を壓したり。これを交通及び内地貿易上より見るも、南岸には、唯一の小倉あるの外、都市として、特筆するに足るものなく、北岸には、山陽の小浪華と稱せらるゝ下關あり、江戸三百年間は、下關の全盛時代にして、その繁華は、全海峽の南北岸を壓して、交通及び内地貿易に於ける海峽の中心點たり代表都市たりしなり。

かくの如く、維新前に於ける海峽は、北岸勢力の時代なり。然るに世界的經濟の大潮流は、門司をして陸に九鐵の基點たると共に、海に開港たらしめ、併せて、北九州一帯をして工業地たらしめ、經濟上に於ける南岸の實力、頓に勃興したるを以て、今の海峽統一問題に於ては、最早、北岸勢力の時代にあらず、各種方面に於ける南岸の勢力、漸く北岸に及ぼしつゝあり。例へば、關稅行政に於て、海峽を統一する税關は、

門司にあり。軍事行政に於て、海峽を統一する師團の司令部は、小倉にあり、海峽の南北に渉る幹線を所轄する鐵道局は、門司にあり。海峽兩岸の金融を統轄する日本銀行支店は、門司に設置されたる等これを維新前に對照すれば、却つて南岸より北岸を統一するの觀なくんばならず。これ海峽統一問題の變遷の上に現はれたる古今、形勢の變なりといふべし。然れども、今後統一問題の進展に現はるべき南北の關係は、未だ逆睹し易からず。

#### 四 事實上の海峽統一

海峽は、事實に於て、漸次に統一されつゝあり。その顯著なる事項を列擧すれば、第一に、行政上に於ては、税關及び鐵道の統一なり。此の二者が統一されたる効益は、言を要せず、統一せざりしときの不便を列擧すれば、聊か海峽の各方面の全體的統一の傾向を促進するに足るべきものあり。神戸鐵道局の幹線が海峽の北岸に至つて極まり、九州鐵道局の幹線が南岸に至つて盡き、海を隔て、鐵道の行政區を異にせし頃には、山陽線と九州線との連絡、動もすれば、圓滑を缺き、列車の延着の爲

め、乗客、辛うじて棧橋に及ぶの光景を冷觀しながら、連絡船の出帆することあり、乗客、頓足すれども及ばず、或は連絡船延着の列車を待ちし爲に後れて僅に、棧橋に着し、乗客、煽ほらるゝようにプラットホームに奔るに、列車、それを見捨て、頓著なく發車することあり、かくの如き喜劇殆んど數へがたし。兩岸の鐵道の連絡不充分なるは、則ち本州と九州との交通の圓滿を缺如するに至る。税關もまた北岸は神戸に屬し、南岸は則ち長崎に屬したるときは、海峽の波上は、南北の税關勢力の抗爭の舞臺たらずんばならず。一にはランチ龜山丸あり、一には端舟サバネあるのみ、外國船が海峽に来るとき、兩岸より共に望んで纜を解くに、端舟は、先だちて發すといへども、つねにランチに、機先を制せらる。關稅行政に於て、關門を統一するに及び固より這般の喜劇を演出すべき所由なしといへども、港灣は未だ統一せられざるが爲に、門司港は福岡縣に、下關港は山口縣に、同一海峽のうち、水波相接して、各、その所屬を異にし、指顧のうち、一々、出入港届を提出するの煩累に堪えざるべからず。門司港に、福岡縣港務部あり、下關港には水上警察署あり、同一海峽のうち、海上取締の出入錯綜するものなきにあらず。此の兩港を統一するの希望は、海峽に出入する無

數の船舶の間に、殊に急なるものあり。元來、下關港と門司港とは、同一海峽にして、稍、錨地を異にするといふに過ぎず。これを各別港として取扱うことが不自然なる爲に、煩累の多きを致すのみ。

事實上に於ける海峽は、經濟的に統一されつゝあり。關門兩市の銀行が、關門手形交換所組合銀行の下に統一されつゝあるは、將來に於ける行政上の海峽統一の理想を實現せしむべき基礎となるべきものならずばならず。ポケットを同じくする市民は、則ち共同生活をなすつゝあるものにして、やがて同一監理の下に置かるべし。此の意味に於て關門兩市が、經濟上、先づ、同一銀行組合の下に統一されるは、共生を營むべき第一歩といふべし。關門手形交換所は、明治四十四年十一月、手形交換に關する規則制定せられ、日本銀行に當座預金を有する銀行のみ加入するを得るものとす。翌四十五年一月四日より交換所を開始し、當初の加入者は關門を合せて僅に八行あるのみなりしが、爾來、現在に至るまで、加入銀行の増加と、交換高の消長とあり、大正八九年、歐洲戰爭の時を以て最高潮とし、交換高も約九億圓を突破するに至れり。およそ本邦に有名なる中央銀行の支店を悉く、此に網羅

したるは、海峽に於ける金融界の一奇觀とすべく、而していづれも關門兩市の一に占據するか、或はその一方を根據として、他方に出張所を有するかに非るはなく、或意味に於ては、海峽は本邦銀行の展觀場ともいふを得べく、概ね支店銀行のみにして、有力なる本店銀行としては唯一の第百十、を有するのみ。それ等の、中央に有力なる背景を有する多數の銀行を統一するものが、手形交換所にして、その加入資格が日本銀行に當座預金を有するにあるが故に、海峽の金融を統一するものは、日本銀行門司支店なり。日本銀行門司支店は、當初下關に置き、西部支店と稱し、東京、大阪に對し、本邦西部の支店を意味したるが、子爵高橋是清氏が支店長たりしとき、門司に移し、自から建築の設計をなしたるもの則ち今の門司支店なり。關門手形交換所の創始は、東京、大阪、京都、横濱、神戸、名古屋、廣島の七市に次ぎ、現時に於ける交換高の順位を以てすれば、東京、大阪、神戸、横濱、名古屋、京都の次に位し、全國に於ける第七位にあり。交換所の任務は、單に手形の交換のみに止まらず、銀行共通の利害問題、則ち預金利子の協定、手数料の徴收協定等の問題は、步調を一にするにあり。手形交換所の外、門司に商業興信所あり、出張所を下關に置く。經濟上の興信に於て

海峽を統一すといふべし。

海峽統一の緊急を要するものは、郵便電信及び電話にあり。關門兩市が既に、經濟上の統一を見る今日に於て、郵便、電話の關係の極めて親密なるは、勿論なり。然るに、兩者の交信が市外なる爲に、その日々、刻々に享有する不便の莫大なるは、想像の外にあり。若し這般の統一を能くせば、常に、その便益のみならず、それが爲に、關門一市の感を爲し海峽統一の觀念を培養し、無意識のうちに統一は行はるべし。郵便、電信、電話に於て、關門を統一して、市内とするは難事にあらず。下關より北九州の西端の都市、若松に至るまでの電話を統一するも、これを東京に比すれば、その輪廓なほ小さかるべし。而して關門の電話を統一するには、單に、海底線の増加を要するに過ぎず。若し、それ海峽連絡船の改良、及びその統一に至つては、郵政の統一よりも、事更に、急を要するものなくんばあらず。

下關と門司との關係は、下關は市場にして門司は工場たり。内外貿易に於ても、門司は港にして下關は荷主たり。門司は、事務所にして、下關は住宅地たり。蓋し、地勢上の天賦より見れば、下關は、東南に面し、北に山邱を負ひ、好箇の住宅地にして、

趣味に富める風景を眺望するに宜しく、門司は西北に面し、風氣の寒熱ともに太甚だしく、加うるに、北九州が工場地帯たるために、併せて、煤烟地帯たり、煤烟に満ちたる風、寸隙より屋内を規ふ。住宅地として到底、下關に敵せず、然れども下關港は、地の狹隘なる、また到底、門司の廣大なるの比にあらず。三十年前、東方策を宣傳し到處に日本の貿易及び港灣とを論じたる稻垣滿次郎氏が、門司港の將來を豫言して、夕陽に面するの港灣にして、世界的發展を遂げたるもの、古今、殆んど稀なり、夕陽は、心身の勤勞に適せざるを以てなりといひ、門司の繁昌は、見るに足るものあるを得ざるべしと斷案を下したるが、門司が夕陽に面するは、萬古渝はることなし、然れども、此の斷案後三十年、その發展は、豫言を抹殺するに足るものなくんばあらず。三十年來、世間に向つて、敢て、大膽に門司の將來を斷言したるものは、稻垣氏の悲觀說を嚆矢とし、次に約三十年を経過したる今日に於て、海峽研究の本書あり。吾等は、眞摯なる研究に基づき、海峽の將來を豫言するものなり。門司に關しては、稻垣氏の悲觀說に對照すれば、樂觀說たるを失はず。吾等は、旭陽の下關、夕陽の門司といふを以て、兩市の繁榮の將來を卜するものにあらず。旭陽、夕陽といふは、單に、地

勢上の關係たるに過ぎざるのみ。而して關門の繁榮ますます進展するの大勢に順應せしむるが爲には、關門の連絡を統一して、以てそれを改良、發達せしむるの最も緊切なるを覺ゆ。その理由、殆んど多言を要せず、何人も體驗するところにして、寧ろ公論なりといふべし。關門交通上の連絡は、連絡船に依り、橋梁の企畫なし。海峽に橋梁を架し、道路と電車軌道とを通ぜしめば、本州と九州を連絡せしむる理想的の企畫たり。若し、それを實現せしむるを得ば、橋梁下の海峽は船舶を出入せしむるだけ、海峽が地峽たるよりも却つて便宜的なり。然れども關門の地勢、直ちに山邱に迫り、海岸の地積、海に沿ふて狹長なること帶の如し。海峽の空に高く架すべき橋梁を起すに足るの奥行なし。これを以て、鐵道の連絡に於ける鐵橋の設計としても、鐵橋工事の起點を、下關を去る七八哩の遠隔地に設定し、それより勾配を盛り上げて、以て海峽を渡過するにあり。或は海峽の橋梁をして、鴨綠江に於ける新義州の開閉橋の如くならしめば、これに依つて著しく、橋身の高度を節減するを得べしといへども、海峽は世界の航路にして、船舶の出入、最も頻繁を極むるところなり。鴨綠江を上下する船舶數と同日の論にあらざるが故に、とても開閉の煩

に堪うべくもあらず。鐵道の連絡は、海底隧道に決定したれば、海峽橋は海峽將來の繁榮の非常なる進展を見るに至るまでは、殆んど見込なしといふべし。倫敦、紐育の大架橋といへども、市街の殷盛は、關門と懸隔あるべし。橋下に、巨船を通ずるに至つては、到底、海峽に及ばず。これを以て關門の殷盛、能く世界的なるを致すとも、大架橋は容易ならざるものあるべし。海底隧道は鐵道の途に局限し、且つその連絡地點、關門兩市の中心と一致せず。

關門の連絡は、主として連絡船に依らざる可からず。現在に於ては、鐵道の連絡船と、私營の連絡船とありて、その起著點が、市街の東西に位置し、海を隔て、相對する長き市街に、交通上の二個の焦點を描き出せり。鐵道の連絡船は、その設備に於て、本邦に於ける連絡船のうち、最も快適なるものといふべく、甲板上、展望の趣味、また豊かなりといへども、發着の度數、客車の連絡と相待つを以て自から制限あり、便宜の點より見れば、私營の連絡船に及ばず。私營の連絡船は、門司市の西海岸通と下關の唐戸とに連絡するものにして、門司側は、石田平吉氏一個人の經營に屬し、下關側は、關門汽船株式會社の經營に屬す。汽船の發着は一日の中、早朝四時より

夜半の一時に至るまでにして、その初と終とは、一時間毎に次は三十分毎に、その最も頻繁なるときは、十五分毎に發著し、關門市民の交通は、主としてこれに依る。そもそも關門の連絡船は、國家的見地に於ては、國道の連絡たり。その連絡の自由に於て、圓滑なるべきは、須らく國道を以て、標準とせざる可らず。また實際に於て、本邦に於ける連絡船の交通、最も頻繁を要するもの、此の海峽に企及するものなし。此の重要にして頻繁なるべき連絡船の經營は、また國家的ならずんばある可からず。現在に於ける如く、これを一個人、若くは一私立會社の經營に委して、顧みざる如きは、實に關門統一の問題たるにとどまらず、實に、帝國の交通大系の發達に於ける一大缺陷たるを失はざるべし。事實に於て、關門連絡船に對する不備の點少からず。連絡船の發著の度數を増加し、且つ終夜連絡をなし、以て日中に於ける交通の必要を満足せしむべく、且つたとへ夜半より早曉に至るの間、交通の寥々たるときといへども、本州と九州との連絡をして斷絶せしむ可からず。現在に於ては、夜半より早曉に至る海峽の連絡は、ランチ若くは押切に依る。押切は則ち櫓を以てする漕舟なり。此の二者ともに高價の貨錢を要す。小舟に駕して殘夜に一哩の

海峽を渡る趣味としては甚だ可なり。交通機關として、不便なるは言ふまでもなし。次に、船舶の改造も亦た適切なる要望たるを失はず。これ等の大小、幾多の要望を満足せしめ、關門の連絡を、ますく圓滑にして、關門統一を促進し、本邦交通の大系の一大關鍵たる本州と九州との連絡を完全にするに至つては、その經營を改良、擴張するの必要あるは勿論なり。關門連絡船は、關門兩市の共同市營に委すべしといひ、縣營に委すべしといひ、或は市營を補助するに、山口、福岡二縣の縣營を以てすべしといひ、また或は、純ら國營に任すべしといふ者あり。吾等は、市營を本として、國營を以て、これを補助するの適當なるを思ふ。而して、その經營は、これを一手に統一し、以て、その運用を圓滿、確實ならしむること必要なり。

關門連絡船は、單に、下關、門司間の連絡に止まる。此の外、海峽の海岸に於ける重要なる交通地點は、彦島、大里、小倉及び戸畑、八幡、黒崎、若松、及び東に長府等あるべし。これ等の地點の間に於ける海上の交通は、今に於ては、未だ圓滿ならず、ともに臨海都市たるに、その交通は、海上のみにては、不完全なる爲に、海陸兩面の交通機關を交用せざる可からざるの不便あり。近來、此等の地點の間に於ける連絡船は、漸次發

達の趨勢にあり。然れども海峡に於ける海上交通網の發達、完成すべきは、海峡及び北九州に於ける要望の一にして、それが實現の曉には、海峡の統一は、随つて促進されるべきを疑はず。海峡の統一は、海上に於て先づ行はれて、展望に於ける海峡が一の盆地たると同じく、交通、連絡の上に於ても、盆地の趣味と見る可きなり。

海峡統一に對する文化的運動は、未だ多くいふべきものならず。海峡、北九州を通ずる文化的結集、もしくは、事業は殆んど無し。史談會、文學會を始め、社會的研究等の團體は到るところにありといへども、未だ關門、若倉を統一するものなし。その曙光とも見るべきものは、吾が海峡研究所なるべし。海峡研究所は、これを門司に置くといへども、その研究の對照は、固より門司のみに偏するものにあらず。經濟上、及び交通上に於ける海峡の地位及び其の將來を研究するにあるを以て、その研究の事業目的は、統一的海峡にあり。中央に於ける研究事業の、全國を對象とするものは暫らく措く。地方にありて近接したる幾多の都市を、統一的舞臺と看做して、研究したるものは、未だ前例あらざるべし。此の意味に於ては、吾が海峡研究所は、海峡全般に對する文化的運動の先驅の一として、自から許すを得べし。

自治行政の上に於ける海峡統一の實現は、今日に於ては、なほ一の理想に屬す。然れども、港灣行政上の統一は、最近に至り、幸に、希望の曙光を見るを得たるは、大に喜ぶべし。則ち東京に於ける第一回の門司港陸上設備委員會に於て、やかた新建するべき門司税關のうちに、陸軍、海軍、農商務省の植物檢査所、外國郵便課等幾多の廳舎を併合することを議決したるものは是なり。此に於て、關門に於ける港灣行政の各種機關は、先づ其の廳舎を同するを得るに至り、海峡の行政的統一は、一大躍進を見んとしつゝあり。來るべき問題は、海峡の各都市の統一及びそれに對する地方行政統一の問題のみなるべし。

##### 五 地方行政の上に於ける關門統一問題

海峡の生命たる港灣は、早晩統一されざる可からざる使命を有するを以て、隨つて臨港都市が統一されるべきは、自明の理なりといふべし。

海峡に於ける都市發達の趨勢を見るに、先づ下關は、將來、その膨脹に順應すべき地積を、海峡方面に有せず、爲に、西日本海方面に向つて膨脹する外、途なかるべくな



ほ多少、海峡に沿うて東方にも延長すべきを以て、他日、長府を併合するに至るべく、維新前藩政の下には、彦島及び下關の大部分は三百年間、長府の治下でありし關係を以て、長府とは因縁も最も深く、此の三者の間には、人文、風氣の融和は容易なるを得べき事情あり。而して彦島は、地理上の自然的關係及び近來に於ける經濟上の關係、最も下關に密邇するを以て、これまた早晚、下關と併合するを得策とすべく、かくすれば、海峡の北側に展列する一市、一町は一大市を形成するに至るべし。北側の全般に涉れる一大市と、南側の門司市とを統一するは、海峡の實勢より見て、自然的歸趨なりといふべし。

海峡の南側に於ける都市は如何。門司市は、東に伸びて、早瀬瀬戸を越えて田野浦に及び、長府町と相對して、海峡の東口を擁しつゝあり。其の西は既に大里町を併合し、足立村を隔て、小倉市と相望むに至れり。そもく世間に、海峡の都市を總稱するもの、關門、若倉の通常語ありといへども、海峡の都市は此に止まらず、なほ一の八幡市あり。北九州に、門司、小倉、八幡、若松の四市、恰も、巨人の行列するが如くに、海岸に沿ふて展列す。高速力の汽船に搭して、海上より、これを望み、或は、九軌

の電車に乗じて、通過するに、四市の間、人家斷續して、宛然として細長き一大都市を經過するの思をなす、二十哩の間、瓦光と壁色と櫛比しつゝあるうちに、所々、海光を交うるあるのみ。かくの如く、幾多の都市が一線に展列するの光景は、阪神間の地帯の外、全國に、その類を見ることなし。阪神間の地帯といへども、幾多の都市、相接近するの密度は、吾が北九州に及ばざるべし。これ則ち北九州の工業地帯の繁盛なり。此の光景を譬するものは、此の工業地帯の繁華が進展の曉、必らずやこれ等の都市の集團が融合して、一大都市を現出するに至るべきを確信せざるはなかるべし。これ等の展列せる各都市の間には、町村を挟みて僅に障壁を保ちつゝあり。若し、これ等の障壁を撤去せば、直ちに、渾然たる北九州の一大都市を現出するなるべし。

かくの如く、北九州の海岸に、長き行列市を現出せしめば、そは一大奇觀たるに相違なし。然れども市の櫛比せる行列は、全然、無意義なり。三つの市にして、肩を並べ、袂を重ねるに至らば、須らく直ちに、相提携して一個の市とならずんばある可からず。軒を連ぬる市街を區分して、二個の市となすべき理由なし。此に於てか、北

九州の行列表は、すべて併合、融和せられて、一大都市となるべき運命を有するものなり。唯だ、その事實となるべき時期が問題なりといへども、必らずしも遠き未來にあらざるべきは疑なきなり。

海峽都市の發達の趨勢、實に、かくの如し。則ち南岸、北岸、各、一大都市を現出し、關門、若、倉の名、廢たれて、假りに、關門の二大都市となるとすべし。形勢かくの如くにして、海峽の南北側の都市の關係は、經濟上、交通上、いよく緊密を加へて、必らずや南北統一して一とならざる可からざるは、海峽都市の發達の歸趨ならずんばならず。事、此に至らば、此の南北の二大都市が、海峽を隔て、獨立、對峙せんは、時運の許さざるところなるべし。

海峽統一を促進すべき運動に依らずして、自然的に海峽市ともいふべき一大都市の出現すべき理勢は、かくの如し。然らば、實現の曉に、これを市としたらんに、は、地方行政の區劃上、果して、これを北岸の山口縣に屬せしむべきや、或は、南岸の福岡縣に編入すべきやは、困難なる問題たるを失はざるべし。本邦に於ける海峽のうちには、形勢の、吾が關門海峽に似たるものなく、且つまた、かくの如き多數の都市の

統一せらるべき場合の發生したる地方は、未だあらざるを以て、前例の、以て標準とすべきもの一もあることなし。將來に於ても、府縣を異にして接近する幾多の都市が統一さるべき、本邦の實例を豫想すること難し。東京、横濱、間、及び大阪、神戸間の二大地帯に於ける戸口は、増殖し、市街は、近接するに至るべしといへども、此の二つの人口稠密地帯と、北九州とは、都市行列の性質を異にす。海峽、北九州の各都市は、その市齡に於て、相似せざるものありとも、伸繼貿易といふ共通の使命を有す。これ全國の顯著なる經濟地帯のうちにて、唯一にして無二なるものなり。縣を異にし、一衣帶水を隔つる、此の特色ある經濟地帯を一大都市として、その行政上の所屬を撰定すべき問題を解決するは、海峽の將來に於ては、勿論の事、これを大にし本邦の經濟上、及び行政上に於ける興味深き大問題たるを失はず。

この興味ある問題の解決は、これを二段に區別するを要す。則ち第一大段に於ては、下關及び門司兩市の統一。而して、第二大段に於ては、關門、若、倉の諸市すべての海峽市の統一なり。統一の理由は、二者ともに、すでに詳論せり。而して、單に、關門兩市の統一としても、海峽市の統一としても、ともに縣を異にし、海を隔つるを

以て、行政上の所屬難たる難問は共通に存す。則ちその解決は、一様ならざるを得ざるべし。而して此の難問を解決する上より見るときは、第二段たる海峽市の場合を以て、理想的とす。吾等の海峽に對する理想とするところは、海峽市及び直接に、その背域たる附近の環境とを併せて別に、新に、海峽に跨れる一大行政区を創立するを要す。此の外に、將來の海峽市の所屬を決定すべき新案あるべし。これを隣接せる福岡、山口の二縣の中に編入せんことは、到底實行し難かるべきのみならず、それは決して、海峽市の本然の機能を進展せしむべき所以にあらず。此の有力にして特色ある經濟地帯をして、獨立せる行政区となすは、本邦西部の代表港灣たり、本邦の代表的の仲繼貿易地たる使命を完くせしむる所以ならずばあらずして、獨立せる海峽行政区の新生は、最も實行的なるべしと思ふ。縣を異にして、各異彩ある歴史を誇負しつゝある海峽南北の二大都市といへども、新らしき大目的の爲に、共に、新らしき行政区を創立するを厭ふものにはあらざるべし。此の新らしき意義ある行政区の名を豫想するは、稍理想的に馳するものあるべしといへども、試みに、これを海峽府、または關門縣の名を以てせば、妥當なるべしと思ふ。吾等の理

想とする海峽統一の實現は、かくの如くにして行はるべし。

## 自然界に見たる海峡

## 一 動植物

自然科学より見たる海峡地帯は、温帯的の濃厚なる色彩を有し、これに加うるに、稍亞熱帯の趣味を帯ぶるものなきにあらず。蝮蛇を除くの外、猛獸毒蛇の深山大澤に蟠居するものなく、山岳の非常に高大なるものなく、自然界は極めて平穩にして優美なり。

海峡の南北に涉りて、牛馬の産額は少からず。大寶令に、長門に牧場を置く。燈臺に名ある角島は、その遺跡の一なり。現在に於ては、大分縣の別府及び九重山に種畜場あり。殊に、九重山は軟美なる牧草に富み、九州の代表的ともいふべき趣味ある牧場たり。阿蘇山中の放牧も亦た興味少からず。海漁の豊富なるは天下に冠たるものにして、鮎の名所も亦た少からず。球磨川の鮎の大なるは特筆するに値す。海峡を通過する魚群の研究及び本邦の最大なる漁業たる下關トロール船

の朝鮮海、渤海、黄海、東海に於ける魚群の種類及び行動に對する研究は、博物學上に貢獻するところ少なからざるべし。魚學者、田中茂穂氏が、魚類の習性研究の爲に屢々海峽に往來するはその爲なり。

海峽の動物にして、古來世上に著聞するものは、壇の浦の平家蟹及び借老同穴なり。平家蟹は必ずしも此の地の特産といふに非ざれども、平家の亡靈の化生なりといふ傳説の爲に、特産の名を專有するに至れり。古より、武文蟹、菊蟲、或は孫太郎蟲といふが如く、傳説上の動物、少からずといへども、その由來は、いづれも一個人に因縁し、平家蟹が、一族の亡靈の化生なりといふ如き、壯大なる傳説を有する動物は、他にあらざるべし。近來、名和靖氏に由つて發見されたる關門白蟻は、また特筆すべし。關門白蟻は、大正六年山陽ホテルの庭木に繁殖したるを、初めて發見され、その形體は、稍大きく、而して、その侵蝕力に至つては、現在に於ける内外の白蟻中、最も猛烈なるものといふ。此の白蟻は、海峽の南北、及び東部は、長府に至るまでの間に發見せられ、大體に於て、臺灣白蟻に類す。恐らくは、臺灣白蟻の輸入されてこの地に於て變化したるものなるべしといふ。岐阜市の名和昆虫研究所に關門白

蟻の標本あり。海峽は、東及び南洋の動植物の輸入せらるゝもの少しとなさず。殊にそれに附隨して、微細なる生物及び、幾多の病菌の輸入せらるゝものあるべく、植物検査及び檢疫の外、一般衛生的に疾病及び病菌に對する檢察機關の必要なくんばならず。關門白蟻は、偶此の意味に於て、世人に警戒を與ふるものなり。

植物より見れば、日向の青島に於ける顯著なる草木は、檳榔を除くの外、海峽の島嶼にもありといふを妨げず。海峽の島にて、多少亞熱帶の趣味を帶ぶるものは、干珠、滿珠の二島なり。その一例を擧ぐれば、青島の武藏鎧といへる毒草あり。全部に毒あり、殊に球根部に濃厚なり。此の草、二島にも産す。だるま菊は、從來、九州にのみ産するといはれしを、近年、彦島にも發見せらる。海峽を渡つて漸く北進するなるべし。干珠島に發見する草の緒は、癌種に特效ありと稱せらる。癌に斃れたる紅葉山人の最後の病牀にも、此の草を服用せし事實あり。干珠島には、維新前に白櫻花あり、遠く海岸より望んで、奇景たるを失はざりしに、これを伐採せしものありて、偶、長府に潛居せし野村望東尼、痛くこれを惜み、伐採者を責めしと傳ふ。海峽より東、數時間の航程にして、室津半島の沖に祝島あり。豊後水道の衝に當り、暖流

を受け、草木鬱茂し、亞熱帶的の趣味を帯び、島民には數多の長壽者を有し、九十歳は島に於て、必ずしも誇るに足らず。宛然として仙島の面影ありといふ。その名物としては、彌猴桃及び大蓬<sup>マキキ</sup>あり。彌猴桃は猿梨と訓す、方言はコッコウ。此の木、海峽地方にも分布すれども、結實せず。唯だ此の島にのみ結實し、殊に、潤澤なり、世俗これを珍異として、仙桃に比す。蓬は、その生育頗る巨大にして、その幹、人の腕に比すべし。祝島には柳井津より毎日小汽船の定期航海あり。海峽より北、日本海に廻れば、青海島ありて、島の東端一角を通浦といふ。此の地に、ゲンゴベイト云ふ宿根草を産す。學名は、花うどといひ、有名なる毒草なり。天下到るところこれを毒草とす。亞米利加にも産し、同じく毒草として知らる。然るに、通浦のゲンゴベイトのみ、食用として、殊に風味佳し。此の島、古來、捕鯨の名所たり。冬春恰も、捕鯨の季節に、此の葉をシタシ、若くは煮て食ふに、一種の芳香あり。その形體は、他地方に比して、毫も、特異なるものを見ず。夏花を開き、幹は三四尺に至る、これを他地方に移植するに、化して毒草とはならず、食用に堪うといへども、全く風味を沒して、更に珍奇とすべきものなし。通浦のゲンゴベイトは植物學者の注目するところたり。長

府町二ノ宮神社の境内にある萱菜<sup>アサギ</sup>の老木は、林學博士、本多靜六氏に由つて發見され、本邦に現存する此種の最大なるものとして、近來、漸く注目せらる。

海峽南北の樹木、その最も巨大なるものは、楠と杉とにして、大分市の柞原神社<sup>クサノハラ</sup>の老楠は、本邦に於ける第一流の大木の一たり。その根幹に於ける空洞は、優に四五十人を收容するを得べし。筑前の宇美八幡宮の老杉も亦た天下に雄視す。干満二島及び、豊後大分より佐伯灣に至るの海岸に多く産するホルトの大木は、モッコクに似て、雅味多し。亭然として麗はしく伸ぶ。臼杵城上のホルトの森は麗はし。關東の庭木に於ける特徴は、カナメにして、關西、殊に海峽地方は、これに對するものは、モッコクなり。苟くも庭園といへば、モッコクあらざるはなし。近時、カナメも亦た西漸するの傾向あり。豊後の佐伯灣には榕樹を産すといへども、但だ氣根を生せざるを以て奇觀に乏し。海峽地方は、本邦有數の松林帶たるを失はず。周防の鞠生松原は、將軍義滿の西遊に知られ、博多の千代の松原は、秀吉に由つてますます著はる。千利休の釜掛松と稱するものあり。唐津の虹の松原は、松浦佐用姫の傳説に名ある、鱒振山下にあり、從來未だ多く世に知られずといへども、その碧海白

砂に沿うて綿亘する茫々たる數里の松濤は、世間に誇稱するに足る。文學博士那賀通世氏、全國の自轉車旅行を試みしとき、東京より此地に來り、日本一の松原と激稱せしことあり。周防の臺道の松原を俯瞰する佐野峠は、蜀山人の紀行に、江戸より長崎の間に於ける第一の好景なりといへり。海峽を彩どる松原は、數へ盡されず。北岸にて宜しきは、殖生の松原、それに和泉式部の遺蹟あり。日本海の壯大なる展望を背景とする小串の松原の好景得易からずも。企救濱の松林中に彦島の青山を背景とする海峽の白帆を望むも佳し。室積の蛾眉山は、その翠色と畫趣と、瀬戸内の橋立といふべし。かくの如く海峽がすでに松林の大地帯たるを以て、隨つて、松茸の地帯たり。東は廣島縣の新庄、周防の山口長門の厚狹殖生等より九州の福岡、香椎等に至るの間、秋は松茸の香を以て充たさるといふも可なり。海峽南北の松茸は、これを關東産に比較すれば、芳香強きを特色とす。近時世間に流行する五葉松は、豊後の祖母山を名産地とす。祖母山は、森林に富み、大木多し。桐の木も、生育、殊に見るべし。豊後の竹田町の料理屋に桐ばかりを以て建造せる離座敷は、桐の間といひ、趣味の旗亭として知らるゝは、以て其の一斑を徴すべし。久留米

は海峽に於ける植木及び盆栽の本場として知らる。その中、筑紫石楠木の一は、その分布も極めて廣く、此に紹介すべし。北九州には石楠木、少からずといへども、耶馬溪には殊に多く、初夏の頃、その懸崖絶壁に花開いて、清流に映發するの光景は、石楠木の畫趣として恐らくは他に匹儔を得難かるべし。肥前七ツ釜の附近一帶は、野生水仙の國にして、白花の咲き満つるとき、雜草、悉く水仙ならざるはなし。

海峽地方には、近來漸く櫻花多し。西田直養の歌に、

「白雲と今は見えねど行末は、こゝも吉野と人や云ふらん」

といへるがその實現は、必ずしも遠きにあらざるべし。櫻花は海峽の北岸にては長府を推し、南岸にては、延命寺を第一とす。關東の櫻花に對し、誇稱すべきものは、躑躅花なり。溫泉岳の躑躅花は天下の壯觀たらずんばあらず。その種類に於ても、一山の中、四十餘種を包容す。海峽地方は暖地なるを以て、東北の霜楓に比すべきものは多からずといへども、豊後の竹田の如きは、高寒にして、その紅葉は九州に稀有なり。すべて古來、海峽地方を代表する樹木、及びその紅葉美は、黄櫨を第一とす。海峽地方は、櫨の國なり。豊後の人、大藏永常の代表作たる農家益は、黄櫨の栽

培を天下に宣傳するもの。當時、佐藤信淵、それに反對し、互に著書に於て論辯せしことあり。黄櫨の紅葉美を嘆稱したるは、頼山陽の西遊詩なり。維新後に至り、黄櫨、漸く衰へ、黄櫨村開かれて商港となり、工業地帯となりしもの少からず。野田卯太郎氏の句に、「門司の市や、元は豊前の櫨どころ」といへるは、能く、實境を描けるものといふべし。海峽の北には、農家益に對すべきものなし。山口圖書館に藏する兩國本草の一部の稿本あるのみ。未だ著者を詳にせず。防長二州の草木を略説したるものなり。黄櫨は、その大勢に於て、漸時減却しつゝ、あれども、北九州地方には、なほ黄櫨美の稱すべき地方少からず。小倉鐵道の沿線の如きは殊に然りとす。

大藏永常の黄櫨説を推稱したる政治家は、渡邊華山にして、華山は三河、田原の藩士なり。一部の政客が、遊興税を以て財政を補ふの策に反對し、華山は、農業を以て、國富の基礎となさんとし、永常を田原に聘して農業を教へしめたり。當時、永常が田原に於て専ら宣傳したるものは、黄櫨の外、薩摩芋及び楮等あり。華山が他日、國事の爲に幽囚中に切腹したるは、則ち永常の舊官舎に於ける農作小屋にてなりし。華山は江戸藩邸の定府詰なりしを以て、田原に住宅なく、永常の爲に建てし舊官舎

をその歸藩後の假寓に允てたり。薩摩芋は此の時よりして、此の地方に繁殖するに至り、初は毒草なりとして排斥したるも、後には、これを栽培するの遅かりしを悔むしといふ。黄櫨及び楮は、遂に繁榮するに至らず。今なほ田原の川口に生存する黄櫨の矮樹は、當年、永常が九州より輸入したる黄櫨の苗木にして、豊前の黄櫨が東漸したる名残なり。永常の後、同じく宇佐地方に、殖田某あり。黄櫨の宣傳者にして、其の研究したる黄櫨を濡鴉と命名し、これは永常とは反對に、南下して、薩摩、日向等南九州地方に繁榮したりといふ。海峽の南北は、黄櫨の權威たることかくの如し。黄櫨の盛衰は時勢の變遷に伴ふ。黄櫨、衰へ工業興る。その間、因果の關係あるに非ず、有利なる工業が、黄櫨の王國を侵略したるに由る。

海峽の南北は、工業上水の必要と、及び都市に於ける給水問題の急要なるものあり。本書には、主に、草木の特異なるものゝみを挙げたれども、時務より見れば、殖林を以て水源を培養するは、その緊急、且つ有力なる問題たらずんばあらざるべし。

## 二風 景



海峽は風景の明麗なるのみならず、風氣の溫和にして生活に快適なるは、全國に秀出すといふを妨げず。本邦の南北に渉る主要なる測候所の調査せる氣温表に徴するに、長春、大泊、札幌等は北方の寒に偏し、臺北は南方の熱に偏す。試みに仁川、大阪、東京と下關との氣温を比較するに、仁川は夏季に於て相近づき、冬季に於て遠く相離る。東京は四季を通じ少し宛低し。大阪は則ち秋冬に於て下り、春夏に於て下關を凌駕し、寒暑ともに下關よりも甚だしきことを示す。されば年間を通ずる氣温表を作製すれば、海峽を通過する氣温の曲線が、波瀾最も少きを見るべし。

海峽は、かくの如く氣温快和にして、満目の青山蒼波に映じ、大小無數の船舶その中に往來す。邱陵に據るの人家より海峽を俯瞰すれば、眞に、畫景なり。殊に雪に宜しく、最も月に宜し。關門兩都市が、相對して、互に波面に映射する燈光の畫趣は、本邦にその似たるものを見ず。月夜には、その光景、恰も天上の星、悉く落ちて、一大水盤に集まり、浮ぶかと思はれ、而して中天に一大明玉の如く、月の高く懸れるあり。早朝海峽を隔て、東海の月出を望めば、海面、悉く輝きて、黄金海より月の昇るを見る。殘夜、曉光の微茫たるるとき、漁舟點々し、白帆、夢の如し。ひとり、セメント工場の

大烟突より、放つ火光、宛として偉大なる蠟燭の燃ゆるに似たるを見る。雪景の海峽は、好景實に月に劣らず。平時、翠光の屏風とも見ゆる青山、雪に依つて忽ち千山萬峰の重疊せるを明らかにす。海峽に吹雪の舞うて、連絡船の交通を妨ぐるに至らざるとき、風趣、畫けども及ばず。海峽の千帆に驟雨一過する光景も亦た印象深し。およそ海峽の畫景、特筆すべきもの、固より此に盡さず。海峽は水面積の甚だ大ならざるが爲に、ランチを操縦するに、最も快適を覺ゆ。ランチを馳せて、到處に悠游し、風光を賞するは、海峽の游に於て殊に愉快なるものなり。海峽に於て、遠來の華客を遇するには、須らくランチを利用するを要す。ランチの甲板に月を見るべく、和風に小宴を張つて、畫景の中に談笑すべし。趣味を以てすれば、海峽はランチの都といふを得べし。

地質上に見たる海峽は、南北を割する所以にあらず。およそ本邦に於ける海峽のうちにて、關門海峽は、その幅員最も狭く、水面積最も小に、水深も亦淺く、これを紀淡海峽及び、鳴門等に比すれば、非常の差あり。南北の地質は、中國より北九州を超えて、西九州の中部に至るまで、同じく、これに對し、東九州の地質は、豊後水道を隔て

、四國に連なる。海峽の南北は、ともに石灰及び石炭岩に富み、南に年額一年千噸の筑豊炭あると共に北に百五十萬噸の宇部炭あり。北に秋吉地方の石灰岩あると共に南に恒見及び東郷地方の石灰岩あり。此の二者は、ともに、一大石灰國たると共に、秋吉地方の鐘乳洞は、世界的偉觀を呈するものあり。東京帝國大學理學部教授神保小虎氏、數年に涉り、數十回の出張をなして、其研究に従事せり。豊前に鐘乳洞の青龍窟、世上に聞ゆれども、なほ小さし。備後の帝釋は、大なる石灰國の奇景なれども、鐘乳洞の誇るべきはなし。伊豫の浮穴郡は、鐘乳洞を以て、郡名となせしが、洞は大ならず。備中に鐘乳洞神社あり、千年の昔、すでに鐘乳洞の奇景の神聖視されたるを見るべし。秋吉地方のは、山口高等商業學校の教師ガンドレット氏の發見に係り、近來の宣傳に屬するを以て、洞に古神祠なしといへども、なほ鐘乳洞の偉觀をして神聖ならしむべき雨乞上人の靈塔あり。秋吉地方の大理石は、地質學者の説に據れば、その質の美なるは、羅馬の大理石に比すべく、その量、遠く及ばざるのみ。此の地方の鐘乳洞は、その數、大小廿餘あり。その雄大なるもの四洞にして、就中秋吉の瀧穴及び景清穴を最大とす。景清穴は、惡七兵衛景清の潜伏したると

ころとの傳説あり、洞中の水量の最も豊富なるは瀧穴にして、川あり、渡舟あり。瀧穴の幅最も廣きところは八十間、最高は六十間に及ぶべく、松明に照らして、仰望すれば、純白の大理石の石理麗はしく懸りて、白雲の搖曳するが如く、恍として、洞中の天あり、白壁高く峙ち、遠く千仞の雪峰を望むの感あり、地下のアルプスを想起せしむ。世界の最大なる鐘乳洞は、北米ケンタッキ州のマンモウスケーヴにして、洞中の大小洞を併せて延べ哩數は、廿哩に及ぶといふ。秋吉地方のも、約十哩には及ぶべし。但だ洞中遊覽の文化的設備未だ見るべきものなし、海外に去來する内外の旅客を吸収するには、須らく這般の準備なかる可からず。海峽地方には、地上の日本アルプス地方に對すべきほどの高山なしといへども、これに酬ゆるに地下の大觀あることかくの如し。また以て、雄を趣味の自然界に稱するに足らずんばあらず。マンモウスケーヴの洞中には無眼の魚あり、秋吉地方のは、洞窟の深さ、未だ無眼魚を産するに至らずといへども、その蟲魚は、學術上、研鑽に値するものあり。なほ洞の外に、山椒魚あり。最近の發見に屬する景清の鐘乳洞は、未だ全く人爲の破壊に觸れざる天工の渾沌洞にして、學術上、研究の材料として、最も貴重すべきも

のなりといふ。

海峡の地骨を組成する岩石の美的に露出するもの、硯材に適せるものを採集して、赤間關硯と稱し、古來、本邦に於ける名硯の第一流に屬するものゝ一とす。赤間關硯の産地は、長門の豊浦、厚狹、二郡及び豊前企救郡の東郷村等にあり。本邦の硯材にして、支那の端溪に最も能く類似するものは、此の赤間關硯なり。硯は、下關名物の一にして、古來、大森氏、世々玉池軒と稱し、和泉掾の稱號を賜はり、海内硯工の巨擘たり。近來の名手を大森頼三とし、東京に移住す。海峡は北岸に硯を産し、南岸豊前の部崎燈臺の附近地方に梅花石を産す。梅花石は、地質學上、岩質は赤間關のそれに同じく、而して、その石面に點々たる美しき白梅花を縷むるあり。此の梅花は、古生物ペンタクライナスの化石にして、ペンタクライナスは、海峡深海底にも生存す。硯と梅花石とを牽強して、菅公に附會するの傳説あり。南岸に文字ヶ關あり、筆立山あり、卓筆峰とも稱す、海峡の水面を硯の海といふ。悠久にして、無言の自然力を語りつゝある地質學上の海峡が、古來文學化せられたること此の如し。天下に喧傳せられて、苟くも風流、音曲を談ずるものゝ知らざるはなき、清元、梅の春

作者は、北岸の長府藩主毛利元義にして、硯海は、その領海たりしを以て、此の曲中に、文字ヶ關、硯ノ海、赤間關等海峡の地名を點出したりしかば、近世の微妙なる三弦の音藝に伴れて、海峡は麗はしく、坊間に宣傳せられたりしなり。

海峡の北岸には、高山なし。山なしといふことを妨げず。九州の山は、六千尺に止まるといへども、名山、實に多し。阿蘇山は世界的火山、海拔は四千尺に過ぎずといへども、踞然として、鎮西群峰の大王たり。久住山また九重山とも書く。山勢、壯麗にして、山膚、極めて美しく。山陽は、その山腰を過ぐるとき、中原を望むの感ありといひ、竹田は別に九重仙史と號す。麗はしき九州アルプスといふべし。由布岳、鶴見山ともに大分の海岸より望めば、壯觀なり。祖母岳は傳説の山にして、文學的なり。雲仙岳は西九州に雄視す。山麓の人、雲泉は、山靈の氣を稟けて、畫人となれるか。北九州に最も近くしては、英彦山あり、風景を以てすれば、耶馬溪の奥の院ともいふべく、修驗道に於ける關西の宗たるは、役行者の開山たるに由るといへども、また海内の名山たるに由らずんばあらざるべし。川は、遠賀川、筑後川、大野川、番匠川、悉く、その風景感を異にし、利用の途亦た同じからずといへども、各觀察の上に、特

## 文化的に見たる海峡

文化的に見たる關門海峡の南北は、炳然たる好對照をなせるものあり。抑海峡に於て、下關と門司とは、一葦帶水を隔て、相對し、その戸口及び富力も略ぼ相匹敵し、税關、陸軍運輸部、海事部、植物検査所、鐵道局等の顯著なる諸官廳は門司に偏在すれども、經濟上には、各種の會社銀行及び有力なる商館等は、概ね、本支店を双方に分有せざるはなく、門司は外國貿易を、下關は内國貿易を主とし、門司は船用炭の供給港として本邦に冠たると共に、下關は漁港として海内無比なる等、互に顯著なる特色を以て相對峙するといへども、これを要するに、正しく相面する此の二つの都市はその綜合的勢力に於て相匹敵すといふべし。これを歐洲及び支那に見るに、海峡都市の相對するもの必ずしも珍しからずといへども、これを香港に見るが如く、兩個の市街の勢力、大小、懸隔するものを多數とし、關門海峡に於けるが如く、正面に相對する兩箇の勢力、相匹敵して、然かも、その經濟的關係の親密なること、殆んど二

にして一なるの實勢にあり、これを複數港として見るよりも、實際に於て、單數港として見るの適切なるに若かざる如きは、殆んど他に發見せられず。ひとり蘇士海峽に於けるポートサイドは、稍相似たるものといふべし。これとても、一方は商業港にして一方は工業港たり、同時に補助港たるの觀をなし、完全に關門海峽と對照するを得ず。然れども、ともに世界的交通の要衝に當れる船用炭の最も有力なる供給港たるの點に於て、關門海峽に匹似する世界の港灣は、ポートサイドなりといふを得べし。

かくの如く相對峙しつゝある下關と門司とは、一は本邦に於ける稀有の舊都市にして、一はまた突如として世間に出現したる新興都市たり。一は二千年來、東洋文明の醱酵地としての顯著なる歴史を有し、一は三十年來泰西文物に由つて啓發したる色彩の新らしき歴史を有す。北九州は、門司、小倉、八幡、若松の諸市の中、ひとり小倉のみ三百年來の歴史を有し、海峽の南岸都市に介在して、ひとり古雅の色彩を帶ぶるものあれども、その餘は、門司と同じく悉く新興市たり。されば海峽の南岸に於ける、文化的雰圍氣は、全然その印象を異にし、北岸は優長にして古文學的

色彩の濃やかなるに、南岸は活發にして殖民地的の感覺を與ふ。北岸は趣味的、保守的にして、南岸は事務的、進取的の氣分あり。その智識趣味、氣風及び衣食住のすべてに現はるゝもの皆、かくの如し。藝術的に、これを言へば、北岸は日本畫の氣分にして、南岸は洋畫の氣分なり。思想及び社會上の新問題は、北岸には盛ならずして南岸に興る。人生の享樂趣味は南岸よりも北岸にあり。維新前に於ける外來思想の輸入の門戸は長崎にあり、此の意味に於て、長崎は、研究に値したるが、近來に於ては、關門海峽が、世界的交通の要路に當れるを以て、長崎の地位は門司に移れるの感あり。此の點に於ても、門司は注目し値すべし。

都市に於ける電燈需要の狀況は、文化の明暗の程度を示すものといふべし。海峽都市を以て九州の重要なる都市と比較するに、人口一人當りの平均燭光及び一方町當平均燭光に於て、嶄然として群を抜くものは福岡なり、海峽は、これに次ぎ、そのうちに下關を第一とし、小倉を第二とす。更らにこれを全國の著明なる都市に對照するに、如上の二點に於て、大阪を第一とし、東京これに次ぎ、海峽との差、少からず。唯だ一燈當平均燭光に於ては、門司市は、九州に冠たるのみにあらず、全國に於

て、大阪の壘を摩するに足るものあるは、特記すべし。

新聞は文化の標準として見るべし。海峽に於ける最近の新聞は時運に伴ひ、顯著なる躍進をなせり。下關の馬關毎日新聞、關門日日新聞及び門司の門司新報は共に三十年の歴史を有す。門司新報は、門司が九州鐵道の起點と決定され、門司築港も企畫され、門司港の名始めて世上に知られ、各方面の情況が新聞を必要とするの機運に應じ、明治廿四年、門司が未だ町制を布かざりしときに創刊し、今日に至るまで三十有餘年を経過したるものなり。當時新聞社は、今日に於て市中の繁華區たる新町の地にありしが、その周圍は漠々たる青田にして、施肥の季節には、臭氣窓を撲ちて、編輯局を惱ましたり。新聞は四頁にして、當時門司には一人の印刷師なく、活字を補充し、及び挿畫の木版も皆、下關に送りて處辨したり。未だ社長の名義なく、小倉の津田維寧氏、社務を監督し、毛里保太郎氏は主筆にして、社務に當れり。新聞の配達には社に於て擔當し、その發行部數は千部に達せずして、社運、艱難を極め、つねに發起者の投資を要するの情況にあり。その一大躍進をなせるは、日清戦後を始とす。日清戦役は、帝國開關以來の大戦争にして、些細なる戦闘事實及び一將

校一兵卒の功話も、國民の血を湧かすに足らざるはなし。中央各新聞社に於ける従軍記者の制、未だ發達せず、隨つて戦地の通信機關の爲すあるものなく、戦報が、最も早く讀者の耳朶を打つは、此の海峽を通過して歸還する従軍員、及び傷病將卒の談片ならずんばあらず。毛里氏は、戦地より本國に往來船の入港するごとに訪問し、戦報を網羅して、その紙上に滿載したるを以て、門司新報の聲價、一時に揚り、戦報の獨壇場は門司新報たるの觀を呈し、全國の新聞、争ふて門司新報の記事を轉載すると共に、門司が戦報採集に對する最も形勝の地たること知られ、中央及び著名なる都市の新聞記者、門司埠頭に集まり、戦報争奪の奇觀を呈し、門司の町に滞在する天下の新聞記者、殆んど百二十名を算するに至れり。小さき門司郵便局は、電報の輻輳に應酬する能はざるの有様にして、爲に、下關に渡りて打電するものも少からず。その間、門司新報は依然として戦報の權威たるを失はず。有名なる大新聞の特派員にして、新報のグラ摺りを乞ひ得て、本社に發送するものあり、當時、高橋是清氏、日本銀行の西部支店長として、海峽にありしが、時々、自ら新報社を來訪して、戦報の敏速且つ委曲なるを賞揚して、新聞を購求せしことあり。新報の發刊高千枚よ

り一躍して二萬枚に達し、從來の印刷機械は、その用に足らずして、爲めに數臺の新機械を購入するに至り、創刊以來、收支常に償ふ能はざりし門司新報は、始めて少からざる利益を見るを得たり。入港の船舶に對する新聞記者の訪問は從來、これなかりしに非ざるも、甚だ稀なりしが、此に至つて、訪問記事は、門司に於ける新聞記者の一大任務となり、やがて、門司に於ける新聞記事の生命となるに至れり。而して海峽に入港する船艦は、概ね門司港に投錨するを以て、海峽に於ける船艦の訪問記事は、自ら門司の特色たり。

日清戦役の次に、北清戦役あり、日露戦役は、空前の大戦なりといへども、國民すでに外戦に慣れたると、新聞社に於ける従軍通信の組織も整備するに至りしかば、戦報に於ける門司新報は、日清戦役に於ける色彩を放つを得ざりき。新報社は漸次發達して、市役所の新築せらるゝに及びその舊廳舎を拂下げて、移轉せり、即ち今の門司新報社なり。新報社と新市役所とを對照すれば、最近に於ける海峽文化の發展を徴するを得べし。

關門に在住する紳士は、船車に由つて海峽を通過する名士の送迎の爲に忙殺せ

らるゝをつねとす。未見の人物、もしくは舊知人の久闊の邂逅を爲すを得るの機會に富むこと、海峽に於けるが如きは、天下の都市に比類なかるべし。海峽代表者は、官民ともに、その職務に、送迎を一要項として特筆せざる可からず。海峽の趣味區が都市としてその富力以上に發展しつゝあるも亦た固より其の爲なり。維新の元老は、特に海峽の趣味に愛着せしが如し。然れども一世の人物、かくの如く、海峽を往來する機會の多きことは、則ち海峽の人物に精神上の刺激を與へ、智識と便宜とを供給し、海峽の文化の發展に資するところ多大なりといはずんばあらず。海峽が帝都を去ること七百哩の遠西にありて、尙ほ、その雰圍氣が地方的の臭味を脱するものあり。社會の一部に最新文化の氣分を含むものあるは、則ちその爲なり。而して、敏腕なる新聞記者の海峽通信は、これに由つて潑刺たる記事を得べく、本國に歸還する名士、注意人物、若くは外來の人物の消息は、その中央に到著するに先だち、海峽通信に於て、その一端を窺知するを得べく、歐洲線の歸航路、及び北米航路が海峽に寄港するの曉には、海峽通信は、いよゝゝその興味を加うるに至るべし。實に海峽は、本邦新聞社の望樓にして、操觚上の税關ともいふべし。此に往來する

旅客は、爲に精神上の關稅を拂はざるべきなり。中央の大新聞社が海峽に支局若くは出張所を置く所以は、常に販賣上の經營によるのみならず、紙田の開拓に外ならざるなり。

日清、日露二大戦役を経過して、海峽の新聞はますます發達し、而して本邦の大新聞社、大朝、大毎、時事新報等は、各出張所を海峽に設け、大朝、大毎の發展して支局となり、大毎は大正十年秋に至り、鐵道局に面して、清瀧に宏大なる支局を新築し、大朝も亦翌十一年を以て東本町に廣大なる支局を設け、本邦の二大新聞が、海峽にその威力を競争しつゝあるかの如き壯觀を呈す。而して海峽に於ける新聞の顯著なるものは、大朝、大毎の外、地方新聞として、關門の新聞と、福岡の福日及び九州日報あり。すべての地方新聞を合せて、大朝、大毎と、殆んど相匹敵すといふも不可なく、加うるに、二大新聞の廉價なるを以てして、地方新聞は爲に、壓迫を被むること實に少からず、地方新聞の經營難は此に存す。然れども、二大新聞の刺激の爲に、地方新聞の發達を促がすことも亦た非常なるべきを疑はず。今や海峽には、二大新聞を初とし、時事、報知の特派員もあり。福岡の二新聞も亦支局を有し、その外、遠近の大新聞、悉

く、此に若干の通信機關を有せざるはなく、畢竟、本邦及び海峽の代表的新聞が、旗幟を鮮明にし、陣容を雄壯にして、此に、損益を超越して、ともに雄を争ひ、鎬を削るの光景を見れば、海峽は眞に新聞の一種の修羅場なりといふを妨げず。海峽地帯の發達に伴ひ、此の現象は、ますます發達するなるべく、それに由つて、海峽の文化に影響すること、亦た、いよゝ大なるものあるべし。かくの如き新聞上の光景は、本邦には、海峽を除いて、他に、一もあることなし。大朝、大毎の支局としては、從來、京都、神戸及び名古屋の三を以て最大機關となせしかども、新建の大朝、大毎の門司支局は、その機能に於て遙にそれ等を凌駕したり。此に於て、新聞は、東京、大阪と、海峽とを合せて、本邦の三大地帯となすに至るべし。

雜誌に於ては、その販布數は、新聞に於けるが如くに、確實なる調査機關なしといへども、その大體に於て販布の密度の未だ濃厚ならざるを察知するに難からず。而して最近に於て「改造」の讀者の増加する傾向あるは、一面に、思潮の趨勢を卜すべきものあり。海峽に發行する雜誌としては、未だ特筆するに價すべきものなし。

藤原勝二郎氏の「海陸輸報」故柳廣一氏の「日本の關門」が共に十有餘年の歴史を有す



るに過ぎず。その餘の定期刊行物、及び書籍の出版に於ては、本邦に於ては、依然として、東京に於て、中央集權の行はるゝを見る、京都、大阪に於ても、尙微々たる状態にありといふべく、海峽は、未だ問題となるに至らずと雖も、印刷業の發達は、稍、注目に値するの現象あり。則ち海峽の印刷者が、中央の刊行物の印刷を引受けんとするの希望なり。中央の印刷所は、すべて消化不良の状態に陥れるに、海峽は中央に比して、工賃の頗る低廉なるものがあるが故なり。而して印刷上に於て、最近、海峽に於ける特筆すべき一要項あり。東京の築地活版所がその出張所を小倉に新設し、九州及び鮮滿地方の急速の需要に應ずるの企畫を實現したることは是なり。その企畫に依れば、九州の中、遠隔の地といへども、註文に應じて、即日、活字の供給を遂行せんことを期するにあり。若し鮮滿に重きを置けば、出張所を門司に於てすべく、九州を主とすれば、門司よりも小倉を可とするは、貨物としての活字は重量に富むが故に、鐵道に於ける積替の度數の節減を必要とするの理由を以て、門司にも近く、且つ豊州線の分岐點に位する小倉を卜したるなり。築地活版所が本邦に於ける活字の權威たるは世人の知るところ。而してその支店としては、唯だ大阪支店の一

あるのみなれば、今や海峽は、新に、東京、大阪と合せて、活字上の三地帯となれるものといふべく、而して小倉出張所は、速かに利益を見るを期す可らざるべしといへども、數年の後、必らずや商機の躍進を見るべきを疑はず。蓋し、海峽九州の操觚界に於て、活字の敏活なる供給は、中央に遠き海峽九州に依て、早天に雲霓を望むの情あり。此の出張所の効率は、意外の發展を見るべきなり。

九州の文化は福岡に集權するの感あり。當初福岡病院の發達が醫科大學の創立を胚胎し、次に工科大學を産み、今や單科大學より進んで綜合大學を形成するの形勢にあり。高等學校を始め、數多の文化機關、此に集合し、爲に堂々たる丸善支店、此に新築せられ、新文化の輸入の機關となれること、譬へば、新智識の港灣に築港したらんが如し。而して舊文化は、福岡縣立圖書館に堆積され、その規模、その蘊蓄ともに地方稀有の文庫たるを失はず。未だ福岡に見ざるものは、博物館なり。九州は最古の日本にして、三千年の久しきに涉り、九州全體として、特色ある文化を有し、その紀念物も亦た隨處に保存され、發見されつゝあり。須らく九州の文化の爲に、一大博物館を造り、以て、京城の博物館が朝鮮文化の縮圖たるが如くに、九州文化の

一大縮圖を作らんことを要す。その建設地は、太宰府を以て適當とすべし。

近年北九州に於ける運動熱の勃興も亦た注目に値す。此の事、社會的に體育思想を鼓吹するのみに止まらず。併せて生々活潑の精神を刺激し、文化的氣分を涵養するに足るものあり。學生の體育に於ける野球、庭球及びランニングの外、各種の運動起り、就中ランニング、殊にマラソンの流行を特徴とす。而して學生以外に、官廳、會社等、公私の團體が殊に運動に熱中するの傾向を示す。小學校及び各種學校の運動會に見るに、その運動の種類に海峽の地方色を帶ぶるものあり。九州には、ランニングの名手、輩出するの趨勢あり、斯界の韋駄天を以て目せらるゝ金栗、吉岡、及び能登、みな熊本、福岡の二縣より出身す。大正十年本邦に於ける最初の遠距離マラソンたる金栗、秋山の東京、下關間七百哩マラソンは海峽を起點とし、同十一年吉岡の千哩單獨マラソンは、長崎を起點として、海峽を通過し、東京に向へり。此の二大マラソンは、海峽の運動界に一大刺激を與へ、殊に、吉岡は海峽に於て、演説したり。最近に上海に於ける極東の陸上競技大會に覇者たる橋本は、渡航の途次、海峽に滯泊せしとき、選手の全員と共に、門司の町に、假りに準備されたるトラックに

於て、練習したるも亦た海峽の運動熱を煽ほりしといはる。當時橋本は一週四百メートルを算するトラックを二週して、轉じて筆立山に奔り登り、曲頭して門司の市街を走過して清瀧山に奔り、更に、町に還りて、トラックを疾驅すること、五週にして、なほ綽々として餘裕を示せり。海峽の運動界に始めて見たる一壯觀たるを失はず。海峽のランニングに於ける學生以外の選手にして、中央の競争場裏に、漸く、その名を認めらるゝもの輩出するの傾向あり。九州の健兒は、繩扑にして、鐵脚あり、海峽は將來運動會にも、一箇の特色ある地帯として、擡頭するに至るべし。

かくの如く、海峽には、文化の標準たる新聞及び活字上に見たる躍進の特筆すべきあり。東京、大阪を併せて文化的にも、本邦の三大地帯を爲すに至るべき形勢ありといふべし。

## 海峡の人物及び藝術

## 一 海峡の北岸

海峡に來る旅客は、乃木大將を追憶せざるはなかるべし。宮殿下も亦た乃木神社に來拜あらせらる。乃木大將は長府の舊藩士、その宅地なほあり。大將の舊友桂彌一氏等相謀りて、宅址に舊宅の模造館を建つ。更にそれに依りて神戸の濱田篤三郎氏、模造館を桃山御陵下の乃木神社の畔に建てたり。大將は十一歳の少年時、父十郎に伴はれ、その一家と共に、江戸より歸藩し、外浦に上陸して、長府に還りしより、此に十年の教育を受け、流風餘韻の尋ねべきもの少からず。一ノ宮祠前の集童館は、長府の松下村塾ともいふべく、一藩の有爲なる少年を教育したる遺蹟にして、當時大將は、既に、助教の一人たり、遺蹟は、當時の面影を偲ぶに足り、土塀の上より覆ひかゝれる老松は、その遺蹟を標章するに似たり。二宮境内にある幼稚園側の椎の老木は、大將、少年時、それに凭れて讀書せし紀念木といふ。海峡の人物にして、

古來世界的の名聲を博せしもの二人あり。乃木大將及び狩野芳崖なり。芳崖も亦た長府の人、實に、新日本藝術の先覺者にして、最後の作慈母觀音が、近世藝術の代表作たるは、世人の知るところ、芳崖、出生の宅址は、字、印内にあり、その長府にての最後の住宅は、中學校通用門と、道路を隔て、南方にあり。芳崖の作品は、此の地方に存するもの少からず。當年、郷里にありし時、不遇を極め、捨て、顧みられざりし作品、今日に於て、珍襲せらるゝを見る。長府には、尙ほ世間の人口に膾炙する人物、演劇に著名なる鏡山のお初あり。お初は本名お察、松田氏、舊藩士にして、その宅址、尋ぬべし。永富獨嘯菴は、豪傑の士なり。長府町、字、才川村の人。獨嘯囊語は尤も著はる。彼の傳來せし砂糖栽培の遺蹟は、安岡村に存す。一字庵菊舎は女俳人にして、七絃琴を携へて、全國を行脚し、風流を以て、藝苑に重んぜらる。その遺著、手折菊一部四卷はその俳句、詩に、自書を挿み、今に至つて、俳壇に珍重せらる。美濃派の宗匠傘松庵を訪ひしとき、その座上、長門の菊舎は鬼瓦といひかけられしに對し、世の俳人を目の下に見るの即吟、及び、宇治黄蘗山に於ける山門を出れば日本ぞ、茶摘歌の一句は、殊に著はる。最近、黄蘗山に此の句碑を立てたり。長府の藩主の中、藩祖

の秀元は、秀吉の養女の愛婿にして、征韓軍の司令官たり。その以前、與次兵衛瀨に於ける秀吉遭難に、馳せてこれを救ひしとき、その態度の沈着、老練なるを以て、秀吉の鑑識を受け、頗る愛重せられたり。與次兵衛瀨の事件は秀吉一生の大難、此の時秀元秀吉の船に尾して從航す。その遭難を見るや、急に、これに馳す。秀吉すでに裸體となり、礁上に立てり。秀元、乃ち輕舸を下し、秀吉を助けて本船に上らしむに、その從士とともに、双刀を脱し、舷上より、これを秀吉の舸中に投じ、秀吉に謁し、衣服、帶刀を捧ぐ。秀元、時に年僅に十四歳。秀吉、大に、その智勇を奇とす。藩主重就は、英雲公の名を以て著聞す、英雲は諡號なり。天明、寛政の頃、熊本、細川重賢、米澤の上杉鷹山、津輕の津輕信政と共に、天下の四名君と稱せらる。元と清末の藩主にし、て、長府公歿して嗣なきを以て、長府を繼ぎ、後、更に萩の宗家を繼ぐ。その人、豪邁にして、經濟の才あり。毛利氏に所謂御撫育制度を確定し、防長財政の基礎を固め、毛利氏維新功業の根本を築き成せり。三田尻の開墾及び鹽田も亦た斯人の經營するところなり。それより二代を経て、藩主元義あり。また一奇才なり。政治上に志を得ずして文學に隠れ、江戸にありては、四方眞顔に狂歌を學び、立机の披露式に、

新作「梅の春」を唄はしむ。清元といへば「梅の春」を連想せしむるほどの名作なり。斯人、また藝術を愛し、嗜味廣く、海峽の沿岸に鷹場焼及び松風焼を創め、支那の陶法を研究す。山陽、竹田、海屋等の名家、下關、長府の間に留滞したるも、此の時なり。

下關の人物、世人に知らるゝは、畫家の小田海僊を第一とす。海僊は下關に於ける萩領の町の紺屋に生る。四條派に名を成し、後年に、山陽、竹田の影響を受けて南畫家となれり。下關に、文人、墨客輩出したるは、山陽、竹田に負ふところ多し。山陽の推重せし人物に、廣江殿峯あり。その人、氣品あり、書畫また一家を爲す。山陽の撰書せし碑文あり、その一生を觀るべし。その文に、赤間關は、西道の咽喉に當り、海陸商旅、輻湊するところなり。而して廣江翁ひとり文雅を以て名を海内に知らる、凡そ橐囊して東西に行く者、一藝を挾むより以上、翁に客たらざるはなし。翁、家甚だ富まず、而も好んで人を推獎し、その窮困を恤むと。幕末維新の際には、竹崎町に白石正一郎、廉作の兄弟あり、船問屋にして、勤王の士なり。維新前に於ける勤王の志士、浪人、九州中國に往來する者、概ね此家に來らざりしはなく、その家は、勤王の運動に於ける一の策源地たるの感なくんばあらざりし。廉作は、生野、銀山に於け

る義舉の首唱者の一人にして、生野に死す。

豊浦郡の瀧部は、烈婦登和の出生地にしてその紀念碑あり。吉田松蔭の文を刻す、登和は賤民の出なり、その夫の爲に、仇討を志し殆んど遍ねく海内を探る。吉田松蔭、その志を壯とし、松下村塾に招いて、その實話を聞き、これを、その實家たる杉氏に宿せしめて、款待せしことあり。爲に登和傳を作りて、世に傳ふ。およそ古來、名士として賤民を款待したること松蔭の如きはなく、また賤民にして、その壯烈傳ふべきもの、登和の如きはあらざるなり。

## 二 海峽の南岸

海峽の南岸には、小倉の外、城市なく、人物養成の中心地なきを以て、隨つて、小倉以外に、人物の著聞するもの稀なり。細川忠興、及び忠利は、小倉より熊本に移封す。此の父子二侯は、國史に著名の人物、而して北九州に於ける最初の有力なる諸侯なり。忠利のとき、宮本武藏來遊し、客分を以て待遇せられ、隨て肥後に移る。武藏の養子伊織は、小倉に留まり家老たり。伊織は、世に鱸武藏と稱す。或は武藏の甥と

いひ、或は奥州山中の一少年にして武藏の客游中に邂逅して、その器識を認められしものといふ。劍伎に秀でしのみならず、政治の才あり、また頗る鑑識に富み、逸話あり。或る日、小倉の市中を、從者をして藥箱を擔はしめて、通行する旅人あり、伊織これを見て、從者をして、其旅宿に追躋せしめ、速に、出立して去るべきの意を傳へしむ、その人、蒼惶として去る。後年に至り、その旅人は由井正雪たりしこと知らる。これを伊織に訊へば、固より何人たるを知らず、唯だ、道を行くに歩測するの意あるを見て、不逞の志あるを疑ひ、退去を命じたるのみなりと答へたり。伊織と時を同じくして、高田又兵衛吉次あり、槍の又兵衛と稱せられ、斯技を以て、古今に鳴る。門人三千人に及ぶといふ。小倉の藩祖、小笠原忠真は、小倉侍從として知らる。家康の外曾孫なり。大阪の役に、力戦して、深手四、淺手三を負ひ、その武名高し、堀田正盛彼を訪ひて、當時の甲冑を見、それに附着せる血痕を、小刀を以て削り、嚙下して、今日の摩利支天に像らんと欲するといへるを以ても、その武名を想ふべし。忠真文教に志篤く、多く名僧を引見し、しかも一宗一派に偏せず、黄蘗宗には、隱元、木庵、即非、法雲等を禮遇し、殊に、即非には、その歸國を途次に迎へて爲に、廣壽山を開創するに至

る。その他、當時の碩徳を引き、自から近衛三藐院に私淑し、西山宗因を延見するに至れり。北九州の文教の振作は、斯人に負ふところ少からず。儒教及び詩人には、石川麟洲あり、元と京都の人、小倉の藩儒となる。時に物徂徠の學、一世を風靡す。徂徠、辨道を著はし、天下、傳誦するに當り、麟洲、爲に解弊を著はし、その説を駁す。近世の學者敢て物氏に抗して氣勢を掲げしものは、麟洲を以て嚆矢とすといふ。麟洲と同時に、相對して土屋藍洲あり、小倉の人、徂徠に學び、その高弟たり。徂徠の學風を鼓吹する者、關西にありては、周防の山縣周南に次いで、藍洲を推す。麟洲の二男に石川彦岳あり、父業を繼ぎ、學頭となり、學制を振興せり。文化八年二月幕府、小倉藩主小笠原忠固を正使として、韓使に對州に接見せしむるや、大學頭林衡及び古賀精里等著名の儒者を選んで、之に屬せしむるに當り、彦岳、藩主に隨ひ到る。精里等その學識、詞藻を推重して、小倉の老先生といふ。遂に對州從駕記及び唱和集を著はす。西秋谷は小倉の藩醫、而して北九州に於ける儒者の後勁なり。小倉の佐久間種は、森戸定崙、秋山光彪、小出正胤、丹羽氏暉、長田美年、西田直養の六人を選んで、小倉六歌仙と稱せり。北九州の學者、文人にして、最も世間に著聞するものは、西田

直養なり。その著書には金石年表、筱舍漫筆、神靈考、豊國考、その他十數種あり、門人には小川敬養、佐野經彦等あり。直養は一世の名流に交を結び、國學に貢献するところ少からず。資性敏捷にして、酒脱、物に拘泥せず、多才多藝にして、趣味頗る廣し。鳴木庵記に自から、その趣味の生活を描けるは、江湖に使ふるに足る。その文には、常に神儒佛の道理を論じ、雪月花をたのしむ。いでその好む所をいはむ。詩は學者の添削を受け、歌みづから、天狗となり、書は石摺を時々ならい、畫は應成に手本をもらふ。樂は東儀の譚面をおぼへ、鞠は中吉が教をわする。茶は宗三が傳授を守り、酒は山神と每晚のむ。是等はかくいといふべきか。亂舞は住音が秘傳をつたへ、瑠璃は太郎が奥儀をさきはむ。狂言は鹽又がぐはひを寫し、踊は中嘉がおどけを慕ふ。洒落は米喜が調子を甘心し、地口は拍勘がはやさを歡ぶ。細は油長がひくにおどろき、太は紅與がひかぬを感ず。豊後はかじ久にかぎり、豊前は長伴にとまるとまると。是等はまるいといふべきか。そのこのまざる所といへば、圍碁、將碁、揚弓、盆畫、殺生、飼鳥、花壇、鉢植、金魚、花火、さてまた山のいもが半うなぎになつたとの奇談、酒の直が只今下つたとの新語には、咽をならしてもよろこぶなり。」浮世三分、山

林に引こむで言行不揃、雅俗混雜前にあるかとするれば、忽然として後にあらはれ、實に何ともかともわからぬ人なりけり。直養は小竹舎と號す。佐久間種は、勤王の志士にして、萬葉の古調を學び、歌稿頗る多し、壯年、志を政治に得ず、隱居して、著述、詠歌を事とし、その詞藻、その筆蹟、見るべきものあり。入江淡は北九州教育家の先驅者として傳ふべし。武術に於ける青柳眞武は、武伎十八流に通じ、新に劍伎に一流を創め、新以心流といふ。文久二年二月六十一歳にして歿す。軍人には、陸軍大將小川又次あり。初め兒玉大將と共に、メツケル少佐の高弟として知らる、北九州に於ける著名軍人の翹楚なり、北九州より出身したる陸軍大將は、後の明石元次郎を併せて二人あり。明石大將は、若松の人、臺灣總督となり、官に歿す。事業家としては、小倉藩の杉生貞則が、東豊前に良港なきを慨き、文政四年、宇島の築港を企て、同八年に竣成したるあり。藍島沖、白洲附近、海路險惡にして、難波船多きを憂ひ、燈臺建設を企畫したる小倉、長濱の人、岩松助左衛門あり。有名なる小倉縮を創めし、菊女は、事歴を詳にせず。醫師には、香月牛山著はる、筑前の人にして、貝原益軒の門人なり。日本醫學史には、牛山を擧げて、古醫方の未だ行はれざりし前に於ける後世醫

方の一大家なりとせり。林洞海は、蘭醫方を修めて、藥物學の發達に功勞少からず、僧侶には、法雲、愚禪、萬丈、紫石等あり、法雲は即非の弟子にして、廣壽山に居る。一代の高僧といふべし。物徂徠に推揚され、元祿の老中、柳澤吉保に尊重せられ、四代將軍綱吉の講筵に侍せしことあり。北九州に於ける方外の巨擘なり。維新前後より、島村志津庵、八隅正名、津田維寧、建野郷三等また北九州の名士なり。黒崎町の宇都宮正顯は、宿本陣にして、勤王の志あり、和歌を能くす。下關の白石正一郎に對し、北九州に於ける勤王運動策源地として見るべきものなり。

門司に於ける藤井高文氏は、維新勤王の志士、藤井九成の末弟にして、九成歿して嗣なきに由り、高文氏の子省三を以て、養子となし、家籍を門司に移すの後、大正四年十二月十五日を以て、九成生前の功を録して、特に從五位を贈らる。蓋し門司に於ける贈位の嚆矢なり。九成は、近世、勤王論の倡首たる藤井右門の曾孫なり。右門は元と越中の入京都に上り、北面の士となる。山縣大貳、竹内式部と共に、寶曆、明和の事變の頭目たり。右門尤も幕府の忌諱に觸れ、鈴ヶ森に磔刑に處せられしが、その維新回天の大業に與つて淵源をなせるは世人の知るところなり。然るに、成辰

の役、江戸城の授受に、官兵を率ゐて江戸城受取の任に當りしは、九成なりしも、宿縁の存するを思はしむ。勤王討幕の第一聲を擧げたる藤井右門の家が、門司に存するは、世人の意外とするところなるべし。

北九州に於ける藝術品の録すべきものあり。豊前田川郡上野村の上野焼は、雅致に富める藝術品として、近時、漸く、その聲價を世間に認められつゝあり。上野焼は、關ヶ原戦後、當時の小倉藩主細川忠興が、韓人尊措を招致して、上野村に、陶竈を築かしめたるが、歸化して、上野喜藏と改稱し、上野焼の元祖となりしものなり。後ち細川氏、熊本に移封するに及び、喜藏は四子の内、二子を携へ、隨ひて肥後に移り、八代焼を創始し、その二子を上野に留めて、續ひて製陶に従事せしめたるものなり。創業時代の上野焼は、古薩摩または肥後古八代などに酷似す。文化年間に至り、裔孫、甫紹、更に樂焼を京都に學び、斯業いよ／＼盛なりしが、維新後に至り之を廢す。



## ○名勝區としての海峽、及びその名物

### 一 攘夷戦の遺跡

海峽は智識及び趣味より見て、特筆すべきもの少からず。その風景の明麗にして、現代の文明的色彩を融和したる、その沿岸に羅列する數多の港灣、都市、青山、島嶼等、各旅客の興味を引くに足るべき特色を有する、これ等の風光のうち、起滅したる國民歴史の大潮流の波瀾、而して將來に向つて擡頭しつゝある國富の動力が趣味に包まれたる光景等、若し、明敏なる案内者をして、實際に、海峽の風光を指點しつゝ、語らしむれば、恐らくは、多忙なる旅客をして、淹留せしむるに足るものあらん。一般には、無味乾燥なる交通、經濟の問題といへども、關門海峽を舞臺として、波光、山色、の間に、これを攻究しつゝあれば、興味は美酒の如く、徐ろに、人を酔はしむるに足るものなくんばあらざるなり。

海外の旅客は、關門海峽を通過するに當りて、香港の風光を聯想せざるはなし。

關門の風景が、香港に似たるは定評なり。海峽に彦島あるは、殊に香港に似たり。伊藤公、韓國統監として、東京に往來する途次、海峽を過ぐるごとに、彦島を望んで感慨に堪へざるものあり。蓋し元治元年、聯合艦隊と長州と講和のとき、外國方より提出したる條件のうち、彦島租借の一條あり。講和の全權委員は高杉晋作にして、新に倫敦の留學より國難を聞き、歸り來れる伊藤博文、井上馨の二人、通譯たりしが、彦島租借を悛拒したりし爲に、聯合艦隊に於ても、これを強ひる能はずして、その事已みたり。彦島租借の代償は百萬圓にして、幕府より支拂ひたり。若し彦島租借にして、事實に行はれしならんには、此明媚なる海峽は、日本の香港たるに至りしならんとは、伊藤公が、今昔を追懷して、時々、人に語りしところなり。此の事、藤公餘影にも載せ、門司の代議士毛里保太郎氏も、海峽の舟游中、公に陪して、親しく聞けりといふ。(日本の香港の一語、眞に、寒心に値す。假りに此事あらしめば、管に、關門海峽なく、日本の西部代表港なきのみに止まらず。實に言ふに忍びざるなり。公の胸中萬斛の感慨、察するに餘あり。此の事を知つて、海峽の風光に對するもの、誰か、また慄然として往事を思ひ起さざる可き。

そもく海峽は、建國以來、國史の大潮流に觸れ、國勢發達の反影、波上に印するものありといへども、多く史談に渉るは、本書の主意とするところにあらず。壇の浦の戦と四國聯合艦隊の來襲とは、國勢變革の旋轉機に當れる大戦なり。壇ノ浦の事は別に述べし。長州が、文久三年五月十日を期し、勅旨を奉じて、攘夷を實行し爾來、數回に渉り、海峽通過の外國船を砲撃したるに由り、四國聯合艦隊は、これに酬ひんが爲に、來襲したるものにして、元治元年八月五日に始まり、同八日に終はり、講和談判となれるものなり。此敗戦は、當時、長州の爲には、大打撃たりしに相違なしといへども、大局より見れば、これに由つて、日本人をして、歐米人の實力を理解し、文明的戦争の經驗を得しめたるものにして、その得るところは、失ふところに勝れるは勿論なり。當年の戦士にして、他日海峽を通過し、巍々たる山上の要塞を仰ぎ見て、當時の激戦を回顧し、吾が臺場を海岸若しくは、山邱の中腹に設けたるを以て、敵彈著々臺場に落下し、非常に吾が砲兵員を苦しめたるが、かくの如く、高く、山頂に臺場を設けて、俯射したらんには、大勢勝つ可からざりしも、尙多少の戦績を收め得たりしならんと言ひし者あり。攘夷は一生の公論なりしも、これを徹底的に實行し

たりしは、此の海峽のみにして、その事、歐米の先進文明國に對して、日本人の意氣を表現したるものなれば、その戦績は、紀念するに値すべし。當時の激戦は、第一日は、午後三時二十分敵艦隊の旗艦より先づ發砲し、攻撃の目標は前田砲臺にして六時に砲火を收め、夜、外艦の陸戦隊上陸して、砲臺を破壊したるが、長州方は、夜暗に乗じて、砲臺を修繕し、翌六日戦争を繼續し、此の日は、壇ノ浦の砲臺最も激戦にして、砲臺の指揮者は、後の公爵山縣有朋氏なり。壇ノ浦砲臺址の紀念碑、今波際に存す。此の日、前田の砲臺、陥るの後、壇ノ浦の砲臺も亦陥り、外國艦隊より陸戦隊を上陸せしめ、長州の殘兵は退いて野戦砲臺に據り、防戦頗る力め、陸戦隊を苦しめたる後、終に野戦砲臺も亦た陥落し、此の夜より翌七日に亘り外國艦隊は、艦隊の掩護砲撃の下に、分捕砲大小併せて七十門を艦隊に搬送したり。外人の記すところに據れば、前田の臺場は、歐羅巴近時の築城法に據り、頗る注意して構造したるものにして、その工事は、大に觀るべきものありといひ、大砲の中には、歐洲製らしきものもあれども、大概日本製なりといへり。當時の臺場工場の工事は、現存するものなしといへども、前田の臺場の一たる、今の東邦電力株式會社前田發電所の社宅地は、當時、奇兵隊

の擔當に屬し、お茶屋臺場と稱せしが、それより奇兵隊の本陣、則ち前田村字角石に至るまでの間、山腰を遶りて、塹濠の趾、今なほ明かに認むべし。國際戦に使用したる塹濠として、本邦に、唯一のものなり。龜山八幡宮も、臺場の遺蹟にして、宮司竹中所房氏は八十五歳の高齢なるが、攘夷戦の目撃者なり。今より見れば、龜山の如く、海峽に斗出したる一小高地を砲臺として戦ひたる當年の戰略、戦術の班を想見するに足るべし。

此の攘夷戦の副産物として、文化的に紀念すべきものあり。奇兵隊は、維新史に顯著なる一題目なるが、文久三年八月、高杉晋作が、攘夷の遂行に堪ふべき精兵を訓練するの目的を以て、編制し、身分に拘はらず、壯健有爲の兵員を募集したるものにして、假りに藩の士族兵を正兵と見做し、奇兵と命名したるものなり。則ち奇兵隊は、階級を打破し、國民的の兵隊を組織したるものにして、事實に於て、徵兵の先驅といはずんばあらず。奇兵隊に關聯して、牛肉を食用とするの一事あり。明治初年牛肉は、所謂文明開化の象徴の一ともいはれしものなり。海峽に於て、攘夷戦、續いて行はれ、壇ノ浦の漁夫、安んじて出漁する能はずして、屢食糧の缺乏を來たせしが

爲め、奇兵隊に於て、舊習を破つて、牛肉食用の一法を按出するに至れり。當時、その意を受けて、牛肉を供給したるものは、今の下關市吉岡茂兵衛氏にして、牛肉が案外に兵員の嗜好に適したる爲め、攘夷後も續いて、これを販賣し、遂に、此地方に於ける、牛肉食用の風習を鼓吹するに至れり。されば、牛肉食用の風習が、早く、維新前に始まりたるは、海峡を以て嚆矢とすべく、吉岡氏の記憶に據れば、その初、吉岡氏に意を傳へたるは、當時の奇兵隊軍監たりし山縣公なりしといふ。攘夷戰の文化的副産物たるは、此の外に、本邦に於ける斷髮會及び汽船の定期航海の先鞭が、ともに海峡に行はれしことは是なり。攘夷戰の爲に、長府の藩が、外國船を購入して軍艦となしたるを名けて、滿球艦といふ。購入は、攘夷戰に合期せずして、長幕の戰爭に、海峡を游弋したるが、當時、藩令を以て、乗組員に限り、斷髮せしめたり。則ち明治に先だち海峡に行はし、斷髮令なり。滿球艦は、維新後、船籍を有して、武器を除去し、定期航海を開始するに至れり。これを本邦の海運史に參考するに、その事、あらゆる汽船會社よりも早く、則ち本邦汽船の定期航海の開始は、海峡に於て行はれたるものといふべし。

## 二 下關及び海峡の北岸

若しそれ海峡の名勝、名物に至つては、世人の話題に上るもの太だ多く、此に列擧するの煩に堪へずといへども、暫らく、その顯著なるものを擧ぐべし。

阿彌陀寺町に於ける安徳陵及び赤間宮は、多く言ふを要せざるべし。安徳天皇の御行衛及び御陵に關しては、古來、諸國に傳説地、多きも、明治に至るまで、これを御陵地として、敬意を奉じ、一代の人物、此地を經過する者、參拜して詩歌を獻ぜざるものなきが如きは、此外にはなし。赤間宮は、後鳥羽天皇の勅命を以て阿彌陀寺を建て、御影堂を奉安せしめ給ひしを起源とす。維新の初、御影堂を改稱して、天皇社と稱し、一無格社に過ぎざりしを、木戸孝允參拜して、社殿を計畫するの志あり。未だ幾何ならずして、明治八年十月七日、官幣中社に列し、赤間宮と改稱し、十月七日を例祭とす。別に先帝祭あり、海峡第一の繁盛なる祭典とす。先帝祭は、御影堂の追弔法會に起因し、鎌倉以來、阿彌陀寺に於て、施行絶ゆることなく、その日伊崎町の中島家の一族、平家定紋の直垂を着し、參拜す。壇の浦の戰後、中島四郎大夫といふ者、伊

崎に潜伏し、丸木舟を造つて漁夫となるといへども、平家の興復を忘れざりし者の裔孫なり。平家の女官、生存せしもの、落魄して賣笑婦の群に投ず。その流を汲む者亦た先帝法會に參拜するを怠らず。赤間宮、創建の後、先帝會を改めて先帝祭と稱し、四月二十三日に始まり二十五日に終はる。二十四日は、中島氏及び女郎參拜の式あり、二十五日は神興伊崎に幸し、中島家より鮮魚の神饌を奉る。およそ是等の紀念すべき古式、祭典、平家滅亡の哀を留めざるはなし。伊崎町の後に平城山あり、新中納言知盛の故城址といふ。御裳川は壇の浦にある小流にして、安徳天皇崩御の遺跡と稱す。阿彌陀寺舊記に、壇の浦沖の汐中に、おきのたぶ、岡のたぶ、といふ拾間四方斗りの水底深きところあり。おきのたぶは、則ち天皇御入水の所と傳説す。阿彌陀寺の跡は、今の春帆樓なり。春帆樓の東に梅坊あり。阿彌陀寺の坊の遺跡の一なり。

阿彌陀寺町は、海内有數の趣味區たるを失はず、海峽の趣味を語るもの、先づ阿彌陀寺町を言はざるはなし。旗亭海に臨み、軒を連ぬ、欄に倚り、海峽の風光を賞すべし。春帆樓は、日清談判の名蹟にして、當時、使用せし椅子卓等の遺物、悉く現存す。

彼我全權委員の旅館に宛てられし李鴻章の引接寺、伊藤公の梅ノ坊、陸奥伯の大吉樓みな此附近にあり。梅ノ坊は、今、森祐三郎氏の住宅となれり。下關には名利多く、永福寺、西谷寺、專念寺等皆、山に倚り、風景を管領す。國分寺は、長府より移したるもの。神社には、櫻山招魂社あり、奇兵隊の創立に係る。小門は海峽の中の小海峽、風趣愛すべし。夏の夜漁を夜焚と稱し、海峽の名物たり。觀瀾閣は伊藤公、朝鮮往來の途次、屢々、游賞したるを以て知られ、海峽に於ける貴賓款待の游賞地たり。下關の河豚料理は天下に有名なり。古來河豚説をいふ者、中毒を連想せざるはなく、河豚は食いたし命は惜しむの俚諺あり。藩政時代、河豚中毒と、琵琶湖の瀬田渡舟の顛覆に死する者は食祿を沒收するの制あり。頼山陽は、下關の趣味に耽溺したる一人といふを妨げずといへども、終に河豚を食はず。人の笑を受くるも辭せずといへり。抑、海峽に來つて、河豚を食はざるものは、未だ海峽の洗禮を受けざるものなり。此意味に於ては、山陽は海峽通に非ずといへども、永富獨嘯庵の著述に河豚説ある如き、また當時、士人、河豚を嫌ふは、慎獨の氣風に本づくことを見るに足るものあり。河豚は、俳句に宜しく、河豚の句、古來、名句頗る多きを以て、新機軸を出すこ

と容易ならず。海峽人に未だ河豚の好句あるを聞かず。相島虚吼氏、下關に來り鱈酒の句あり。いはく、河豚の杯捧げ見入るや、河豚の鱈諸國に河豚料理あれども、鱈酒は、海峽の別趣味に屬す。

長府は、海峽趣味の別家區をなす。長府の名勝は、第一に乃木神社、及び乃木舊邸なり。豊浦宮の舊址に、忌宮あり。二ノ宮と稱す。八月七日より十三日に至る夜祭に於けるスホウデンの古式は一觀に値す。町民一般に幟竹を出し、神功征韓の役に埋めたりと傳ふる鬼の首を、大鼓、三味線に合せて踊り廻る、竹は互に高さを競ひ、十數間に至るものあり。乃木大將は東京に在りても、終生、幟竹を出すを例としたり。大將は、スホウデンを數方勢と書す。二ノ宮及び一ノ宮に於ける十二月七日より十四日に至る御忌祭には、ともに神境をめぐりて七五三繩を張りて、出入を禁じ、その間、町民一般に、音楽及び裁縫を廢し、鋏、小刀等を使用せず。今は昔の如く、嚴格ならずといへども、宵に戸を閉ざし、游歩を慎み、忌齋に居るの態度を失はざるは、世間、稀觀の舊習の存するものにして、一に皆その起源を神功皇后、征韓の故事に結合せしむ。功山寺は名刹にして、維新前に、三條實美卿等五卿ノ滞在の遺跡なり、

當時の座敷なほあり。高杉晋作、獨力以て、義兵を擧げ俗論を一掃するの快舉は、實に此の寺に五卿に拜辭して出發す。寺門の前に、高杉晋作回天義舉之碑あり。時に、晋作年二十六。近世、稀に見るの痛快事となす。寺内の觀音堂は特別保護建造物にして、その天井は、丸山晚霞氏の筆に成り、比馬零山の石楠花の各種百有餘を描く。從來の天井畫の舊套を破るものなり。覺苑寺は悦山の開基にして、悦山は書悦山と稱せられ、書家として、黄蘗宗の巨擘なり。一ノ宮の神殿は、室町時代の代表的建築として、斯界に尊重せらる。國寶に朝鮮鐘あり。境内の公園のテニスコートは四面の青邱蒼翠、テニス網を染めんとし、海峽に於ける好箇のコートといふべし。長府沖の干珠滿珠の二島は、海峽の畫景を點綴す。海峽の東口外に於て、此二島を風景の中心とすること、鹿兒島に於ける櫻島の如し。仲哀天皇の御殞歛地は日頼寺山にあり。

### 三 北九州一帯

北九州の名勝は、早輶瀬戸を以て始まる。萬葉集に「早輶の瀬戸の磐も、年魚走る

芳野の瀧になほ及すけり」の歌あり。瀬戸に臨みて、和布刈神社あり、謠曲、和布刈に由つて人口に膾炙す。祭神は彦火々出見尊、式内の神社なり。除夜、神官、火明を照らし、海中に入つて和布を刈るの神事あり。海峽趣味の結晶ともいふべき古式にして、また本邦の神社に現存する、尤も神秘的なる行事の一とすべし。門司關址は、和布刈神社の東六町の許にあり、甲宗八幡宮は、下關の龜山八幡宮と相對し、ともに國道の連結點たり。社前の三綱石は三韓の朝貢船を繋ぎしといひ、名螺石は三韓五螺の如く朝貢するを象徴すとの傳説あり。八幡宮の背後の筆立山は卓筆峯ともいふ。海峽を展望するに好し。眞光寺の境内には有名なる薄墨櫻あり。門司の俚謠に「門司の眞光寺の薄墨櫻、關にもたれて、もじで咲く」といふ。楠原村は、今、門司市街の中心となれり、古、一大老楠ありて、その枝葉、葛葉までも覆ひしと傳ふ、その株の一片を留むるもの大楠株と稱し、門司名所の一とす。清瀧公園は、清瀧山に依り、煤烟の北九州に閑雅の別天地を爲す、海峽に於ける最大の遊園にして、麓に門司俱樂部あり。石炭海運銀行の三業者の合同して創立せしところなり。白木崎は、玄海の夕照を望むによろし、眼前の海上に巖流島あり、舊名船島。宮本武藏、佐々木

巖流と眞劍試合をなせし舊蹟なるを以て、殊に入口に膾炙す。武藏時に年二十九、生涯六十有餘度の最後の仕合とす。小森江には久留米屋敷あり。維新前有馬侯の船入場たり。今、鈴木組の諸工場、建て並ぶ。大里は、昔、内裏と書す。平家歿落の際に於ける安徳天皇の柳の御所の舊蹟あり。柳の御所は、平家物語、源平盛衰記に由つて著はる。今、その地域を疫神の森といふ。明治三十五年、大演習に際し、明治天皇、統裁し玉ひ此地より上陸あらせられし假御殿の御休憩所を、此に移して、柳の御所の舊蹟とし、安徳天皇を奉祀す。古老の傳説に古來、來船の森に小祠あり、その中に體の木像を安置し、その一は、安徳天皇の御像なりしといふ。平忠度の歌に「都なる、九重の内、戀しくば、柳の御所を立寄つて見よ、また君住めば、こゝも雲井の月なるを、猶戀しきは都なりけり」といへるは當年の柳の御所を偲ぶに餘あり。玉泉寺には舊小倉藩第一と稱せられし櫟の大木あり。昔九州中國の交通點たりし大里の渡船場は、今はたゞ牛馬渡を存するのみ。勢ヶ原は、六孫王經基、閔兵の所と傳ふ。與次兵衛ヶ瀬は、海上五町にあり、海中の暗礁にして以前航海者を惱やましたりしが、内務省の海峽整理によりて破脱せられ、航海上些の支障なし、亦た此の暗礁は秀

吉遭難事件を以て著はる。或はいふ、與次兵衛は秀吉を以て、兄の讐とし、故さらに瀨に觸れて舟を摧けり、或はいふ、與次兵衛責を引いて自殺せりと、事の眞想未だ容易に知る可からざるものあり。延命寺山は、赤阪に在り。千呆禪師嘗て此に遊び、題するに西海第一勝を以てす。後に足立山を負ひ、前は大瀬戸に臨み、朝暮、展望、眞に絶佳なり。山上に、宮本武藏碑あり、養子伊織の建つるところ、元と武藏山にありしを此に移す。碑面題して、兵法天下無雙、播州赤松末流、新免武藏、玄信二天居士、碑といふ、碑は、天然石を用ひ、雄偉にして、此の劍聖の威容を想はしむ。抑、劍は、眞に、日本の國伎、而して國民精神の精華なり。劍聖の紀念碑、帝國の玄關たる海峽に聳へて、先づ外客を照すは、會心と事のいふべし。

足立村は、北九州に於ける一の名勝區たるを失はず。世上に著聞するものには、妙見社と廣壽山とあり。足立山巔の御祖神社は古來、妙見宮と稱し、海峽附近に於ける妙見社の最も壯大なるものなり。本來、妙見社は北辰を祭る。大内氏が妙見を信仰するは、半島より齋らし來れる祭屋の舊習にして、支那、朝鮮の交通關係の頻繁なる海岸には、妙見社あり。妙見社の分布は、古の大陸との交通關係を徵證する

に足るの資料たり。然れども、此妙見社の縁起は未だ詳ならず。社は上下兩宮あり、上宮は則ち山巔の妙見宮にして、海峽に於ける展望絶佳の所とす。古歌に、世渡りの業とは見えす、春の日の、長門の海のおまの釣舟といへるは、海峽の漁舟、畫くが如き興趣を詠ぜるもの。下宮は西麓にありて、和氣清麿を祭る。足立の地名は、和氣公に因縁すと傳ふ。僧道鏡、清麿を明りて大隅に流すに、途中、宇佐の海を過ぎ、て神風に吹かれて上陸し、足立山麓の温泉に浴するや、忽ち瘡ゆ。乃ち山巔に登り、壇を築きて、十月八日より十五日に至るの間、絶食して、以て道鏡を退け、妖雲を一掃せんことを北辰に祈るといふ。その後、公の男、爲綱、星靈を上宮に遷し、西麓に平癒寺を開基す。和氣公の浴せしといふ温泉は、今の會根村湯川にあり。蓋し、足立山の妙見社は、和氣公の誠忠大節と、東亞傳來の祭屋の古俗とを北九州に於て結びつけたるものならずんばあらざるべし。寛政七年、足立山より發掘せる九面の古鏡は、錄して集古十種にあり。鏡銘に、承安四年と記す。廣壽山福聚寺は、深林に巨剎を卓出し、環境、實に幽邃を極め、北九州の仙境といふべし。寺は黃蘗宗にして、本山に次ぎてその名、世に聞く。寛文四年十二月、藩主小笠原侯の乞に依り、即非地を此



に相して開山となれり。即非の撰びし廣壽山八景あり。即非の座禪石あり。寺後の山上に五百羅漢の像あり。忘言亭址は、鳥越峠の中途にあり、物徂徠の記文に著はる。亭上より海峽の眺望を記して、列橋如鳥、千山如齋、雲物間之、蜃氣結樓といへるは、簡古にして趣味横溢し、海峽文學の名句の一とすべし。城野停車場の附近、龜ヶ窪に、微塵彈正の墓あり。微塵彈正は、演劇に由つて人口に膾炙す。彦山靈現記の仇討の仇人なり。彈正はまた京極内匠ともいふ。豊臣鎮西軍記に、彈正は、吉岡無二齋を暗撃し、逃れて小倉に來り仕へんとするを吉岡の妻並にその二女、園、菊の三人追跡し來る。偶秀吉西征に際し、命じて射鹿野に仇討を爲さしむ、三女の助太刀は、英彦山下の毛谷村の人、毛谷村六助。後ち、加藤清正に事へて名を貴田孫兵衛と改め、征韓役に勇名あり。六助は、彦山の豊前坊に於て、天狗に武藝を學びしと傳へ、北九州に於ける唯一の英雄談ともいふべし。

小倉の東長濱に連る海濱の松原を、企救の濱といふ、實朝の歌も見たれば、北九州名勝の最も古きもの、一なるべし。小倉城は、一名涌金城といひ、また勝山城ともいふ。小倉城址は、海峽に於ける唯一の城址にして、維新前には、その粉壁、層樓、實に、

海峽に來航せる外客を驚異せしめたるは、韓人申維翰の海游記に徴すべし。海游記は韓使の日本記行のうち、に於て、傑作と推すべきものなり。宗教より見たる海峽に於て、特筆すべきものは、黄蘗宗の興隆なり。隱元禪師長崎に渡來し、京都の黄蘗山に往復せしとき、海峽を過ぎて、屢淹留したるを以て、黄蘗宗此に興り、下關に及び小倉に於て最も其の盛を稱し、名僧も輩出したり。小倉と板櫃村との境に、九軌の發電所あり、小倉、門司、八幡の三市の電燈、電力及び九軌電車の動力の一切を供給す。安國寺には、伊達騒動に、原田甲斐に與みしたる爲に、西謫して、此に死せる伊達宗興、及び最上騒動に於ける山形彌一郎の墓あり。八阪神社は、細川忠興の造營に係り、その例祭は、北九州に在つては、下關の先帝祭に比すべき繁盛を呈す。「關の先帝、小倉の祇園、雨がふらねば風が吹く」の俚謠、以て證すべし。九軌の荒生田停留場の西にある豊筑境界の礎は、書法を以て小倉藩に事へたる木部流の祖、木部市左衛門の書するところ、境界標として保存すべきものなり。

黒崎には、舊本陣たる櫻屋あり、慶應元年正月、三條實美等五卿、長州より太宰府に動座のとき、下關より航して、此に上陸し、旅館に宛てられしものにして、當時の屋室、

及び寢具、食器など、五脚の使用せられしもの一切を保存し、なほ西郷隆盛、月照、望東尼を始め、維新志士の舊縁も少からずしてその遺墨の存するもの多し。煤烟の北九州に於ける異彩ある史蹟といふべし。

#### 四 煤烟都市の印象

北九州に於て、工場の尤も多きは大里町と板櫃町となり。大里の地利に逸早く著目して、土地を買収したるものは、淺野總一郎氏なるが、明治十九年の事にして、坪五拾錢なりしといふ。今より見れば上代史を讀むの感あり。日清戦後、八幡に製鐵所の設立さるゝに當り、鈴木組は、此に資本を投じて續々、製糖、製粉、麥酒等の工場を設立し、大里の中心的勢力たり。板櫃町は、大里町に反し同じく工場の多きを誇れども、中心的勢力の存するものなし。足立村は小倉に隣し、廣大なる地積を有すれども、北九州の工業は、海岸に於ける海陸交通運輸の地利をトして發達せるものなるを以て、海岸と鐵道の便とを多く有せざる此の村は自から閑却せられざる能はず。然れども小倉鐵道の貫通し、一面に小倉築港完成せば、稍その面目を改め、工

業地帯に竄入するに至るべし。小倉は、經濟上、北九州に特色を有するは、商業地にして、工業地にあらざること是なり。戸口の中、十の六は商にして、僅に十の二を工とす。小倉に、尙ほ北九州に於て紀念すべき事あり。九州電氣軌道株式會社の軌道が敷設さるゝに當り、未だ適當なる宣傳の術語なきを以て、北九州の包括的意義を創意して宣傳を力めたるものは、同會社の庶務課長たる宮田兵三氏にして、爾來此一語が廣く普通語として天下に行はるゝに至れるなりといふ。

戸畑は、男爵安川敬一郎氏の根據地にして、その創立したる明治専門學校は世間に著聞す。北九州に於ける唯一の専門學校にして、その規模、頗る見るべきものあり。八幡市は、則ち日本に於ける屈指の勞働市たらずんばあらず。明治二十二年町制施行の時は、なほ微々たる町なりしが、明治二十九年に製鐵所の創立と共に、町勢勃興し、人口、著しく増殖して北九州に於て第一位を占め、九州全般に涉りて、長崎に次ぎ、第二位の人口を有す。市の地積約四百五十萬坪にして、製鐵所の構内及び構外の敷地は約百五十萬坪を占め、人口に於ても約六割は製鐵所に關係せり、製鐵所に日夕出入する官吏及び勞働者は、約二萬人を超過す。その一戸平均三人なり

とすれば約六萬人なり。されば八幡市は事實に於て、製鐵所を核とすれば胡桃の如き都市ともいふべく、随つて地積大なるのみにして市の税源に苦しむを以て、製鐵所より年額三十萬圓を支出して市政を補助しつゝあり。かくの如き徹底したる工業市は、全國に無比といはざる可からず。製鐵所に至つては、東洋無比の大工場にして、北九州に於ける工業の勃興は、北斗七星の樞星に嚮ふが如く、本所の創立に誘發されたるもの少からず。その當初の製鋼能力は五萬噸の規模なりしを駈々として吾が國勢とともに進展し、二十年にして、七十五萬噸の能力に達するに至れり。そもく製鐵所が此に創立されたるは、北九州の地利を利用し、石炭と及び對岸の朝鮮、支那、新嘉坡より鑛石を輸入するの利便に據れり。若松港は、北九州の西端に位し發達の素質は、海峡に併せて、洞海湾に據るにあり。元來、三百年前、寥々たる一漁村に過ぎざりしを、福岡藩主黒田長政の入國するに及び、此所に船司舟人を置き、大阪に至るの航路に備へしめしより、始めてその地利を認められ、爾來、漸次發達して對岸の黒崎と相俟つて、商業港となるに至りしが、維新前には未だ發展の見るべきものあらず。維新後、蘆屋が、石炭市場となりしに際し、若松は多少の艤船

を通ずるに過ぎざりしを、明治二十三年若松築港會社企畫せられ、同二十四年に筑豊興業鐵道の開通するや俄然として、發展の曙光に接し、石炭市場は蘆屋を去つて、若松に移るに至れり。

### 五 環境の趣味帶

交通機關の發達したる現代に於ては、海峡を中心として、半日、若くは一夜の船車程を半徑とする距離は、すべて行游圈に編入するを妨げざるが故に、海峡の趣味帶は事實に於て、擴大されたりといふべし。則ち東は宮島、及び岩國の錦帯橋より、南は鹿兒島及び球磨川の川下りに至るまで、すべて趣味に於ける海峡の外輪たらずんばあらず。

然れども福岡、長崎、熊本、久留米、佐賀、鹿兒島の諸都市、各名勝の獨立圈を有するも、此に詳説するに堪へず。海峡の南北は、神社帶ともいふべき程に、著名なる神社多し。海峡に斗出する龜山八幡宮を始めとし、宇佐八幡宮、太宰府の天満宮、箱崎八幡宮、香推宮、高良山神社、久留米の水天宮、宮市の天満宮、及び筑前福岡の宮地嶽に至る

まで、皆海内著名の巨祠にして、三四十里以内に密集するは、畿内を除いてこれほどの神社圏あらず。久留米には水天宮の外に、高山彦九郎の墓あり。海峽は神社圏たる外に、一面には温泉帯たり、泉都を誇稱する別府の外に、設備の整頓せる雲仙あり。武藏野、嬉野、武雄、湯の平、俵山、深川、川棚の如きあり。山口縣廳を有する山口には、湯田あり、縣廳を有する唯一の温泉地なり。温泉及び地獄に富むこと別府は海内第一たるべく、その砂湯は、實効と興味を兼有す。宮地嶽に隣して、筑前の津屋崎は、鯛網の名所ともいふべし。唐津は、西九州の風景國、玄武岩の奇勝、筑前の大門と、肥前の七ツ釜との中間に唐津あり。肥前名護屋は、秀吉征韓の本營、その勝、男岳の頂上に於ける快感はいふべからず、山麓、群雄の營址、歴々數ふべし。博多の仁和加は、關西趣味の横溢するもの、鎮西の一大名物なり。仁和加の起源は、太だ遠からず、近世、劇道の發達に伴ひ、博多に於ける盆踊が、劇的形式を備うるに至れるものなるべしといふ。宮市の天満宮より三田尻鹽田を大觀すべし。三田尻鹽田は、天下の大鹽田。大牟田の炭坑は、その設備、石炭の王國に冠絶し、趣味としても一觀に値すべし。山陽が耶馬溪、山天下無の一句を以て天下の代表的風景地となれる耶馬溪

は、奇勝の多く發見されたる今日に於て、必ずしも、天下第一たるを保せずとするも、風趣、眞に愛すべし。豊後の沈蛇瀑は、九州のナイアガラと稱す。幅六十間、高さ十間。雪舟の寫生圖あり、藝術史上の名蹟といふべし。世界的奇勝は、山口縣秋吉地方の鐘乳洞、その外、長門峽の溪谷美あり。長門峽が、丁字形の溪谷を有するは、地質學上極めて稀有にして、僅かに佛朗士に、その比を見るのみ。山口縣の仙崎町に對する青海島は、日本海に面する、斷崖絶壁の奇勝、裏日本第一といふを妨げず。豊後に於ける田能村、竹田、廣瀬、淡窓、三浦、梅園、帆足、萬里の四大家の舊里に於ける遺蹟は、皆尋ねべし。竹田の郷里、竹田町の風景觀は、耶馬溪以上なるべし。河内谷は最も可し。耶馬溪の門戸たる中津は、福澤諭吉の出身地、公園に獨立自尊の巨碑聳ゆ。豊前、築上郡友枝に存する奈良朝の瓦甃の舊蹟が、完全に保存されたるは、考古界の奇蹟として、學者の間に珍重せらる。蓋し、此の地帯に於ける獨特の名所は、山口縣熊毛郡八代村と、薩摩の阿久根に「鶴の王國」あること是なり。本邦に於ける、鶴の渡來する名所は、但だ此の二箇所のみなり。すべてこれ等の奇勝、名勝、實に海峽より半日若しくは一夜にして達すべく、夜半に發して到るを得べし。かくの如く説き

來れば、海峽の南北、また一の趣味帯たらずんばならず。世人往々煤烟の北九州を想像し、その趣味に於ける乾燥無味なるべきを連想するもの少からざるは、未だ海峽、北九州の風土及び其國情に通曉せざるの致すところにして、北九州は工業地帯たるが爲めに、煤烟、空を蔽ふものあるは事實なりといへども、此新文明の雰圍氣の中、實に、津々たる趣味の漂へること此の如し。此雰圍氣の中に居住し、或は旅客として若干時日の淹留を存すことありといへども、巧みに趣味を辿り得ば、毫も、清新なる生を樂しむに妨げざるべきなり。

大正十四年一月廿八日印刷  
大正十四年一月三十日發行  
大正十四年九月二十五日再版發行

非賣品

編纂者 中野金次郎

東京市四谷區右京町十三番地

印刷人 阿部節治

東京市京橋區宗十郎町十五番地

發行所 海峽研究所

門司市棧橋通り八番地  
合資會社巴組内

印刷所 東京國文社

東京市京橋區宗十郎町十五番地



終